

ダマスコスのヨアンニス『聖像破壊論者への三つの論駁』(1)

—— 第一論駁・第二論駁 ——

菅原 裕文

解説

ダマスコスのヨアンニスの生涯について確たることは知られていない。エルサレム総主教ヨアンニス 8 世クリストミティス（在位 1098 ～ 1106/07 年）による最古の伝記は伝説的な要素が多く、信憑性に欠ける。そもそも件の伝記作者ヨアンニスの特定すら疑問視されているのが現状である。

ヨアンニスの生涯の概形を描くとすれば、以下のようなだろう。650 年頃（あるいは 675 年頃）、ダマスコスのアラブ系キリスト教徒の家系に生まれる。祖父サルグーンと父マンスールは在ダマスコスの財務官としてビザンティン皇帝、636 年以降はカリフに仕えたという。讃美歌作者としても名高い、弟のマイウマ主教コスマス（743 ～ 752 年）とともに高度な教育を受けて育った。伝承によれば、コスマスは捕虜となったイタリア人修道士で、父マンスールが養子とした上でヨアンニスの家庭教師にしたとされる。

ヨアンニスは父の跡を継いで官僚としてカリフに仕えていたが、やがてコスマスとともにダマスコスを離れてエルサレム近郊のマル・サバ修道院で修道士になり、エルサレム総主教ヨアンニス 5 世（在位 705 ～ 735 年）によって司祭に叙階された。彼らがダマスコスを離れて修道生活に入った経緯は謎だが、これと関連すると思しき有名な伝承がある。ヨアンニスはビザンティン皇帝に使喚されたカリフによって右腕を切断された。激痛に苦しむヨアンニスが聖母子のイコンに祈りを捧げると、奇跡的に右腕が回復された——この逸話が「三本腕の聖母子像」の起源とされる。その後、カリフは過ちを認めてヨアンニスに復職を請うたが、彼は既に修道生活に入る決意を固めており、翻意させられなかったというものである。伝承の真偽はともあれ、700 年頃にはウマイヤ朝 5 代カリフのアブド・アル＝マリク（在位 685 ～ 705 年）が反キリスト教政策を推進、弾圧を行ったことから、キリスト教徒であったヨアンニス兄弟もこれを期に世俗を捨て、修道生活に入ったのだろう。

ヨアンニスは生涯を通じてビザンティン領内に入ることはなく、エルサレムの聖堂で教えを説き、修道院で著作に専念して過ごした。749 年（あるいは 753/54 年）、マル・サバ修道院大ラヴラにて永眠したとされる。死後、聖像破壊派の主催したイエリア教会会議（754 年）でマンスールという家名がイスラーム的であるという理由で断罪されるが、生前から高い評価を受けていたヨアンニスは第 2 ニケア公会議（787 年）により名誉を回復されて列聖された。祝日は 3 月 27 日。

ヨアンニスは東方正教教理の大成者として知られ、主著『知識の泉』（*Fons Scientiae*）は第 1 部の弁証論、第 2 部の異端論、第 3 部の正統信仰論からなり、哲学史や異端史を踏まえた上で、

ギリシア教父と公会議の流れを汲むキリスト教教理の総合した大著である。他に『聖なる乙女マリアの就寝』(In dormitionem sanctae Dei genetricis Mariae orationes)をはじめとする講話や、『イスラーム教徒論駁』(Disputatio Christiani et Saraceni)等、多数の論駁を著した。

ここに訳出する『聖像破壊論者への三つの論駁』(Contra imaginum calumniatores orationes tres、以下『聖像擁護論』)は、ヨアンニスの数ある駁論の中で最も有名なものであり、ビザンティンにおける画像理論の集大成と目されている。献呈先や著作年への言及はないものの、記述から大凡の執筆年代を推定することは可能である。第二論駁12章に「最近では、言行により輝く祝福されたゲルマノスは罰せられて追放された」とある。コンスタンティノポリス総主教ゲルマノス(在位715～730年)が聖像破壊運動の主唱者レオン3世(在位717～741年)との対立の末に罷免されたのは730年のことである。とすれば、第二論駁が書かれたのはヨアンニスが住むエルサレム近郊までニュースが届いた730年の直後、それゆえ第一論駁は恐らく聖像破壊運動が勃発した726年から730年以前と推察される。

さらに『聖像擁護論』の随所に痛烈な皇帝批判が見られるが、ヨアンニスの舌鋒はレオン3世のみに向けられ、その子コンスタンティノス5世(在位741～775年)への言及はない。周知の通り、コンスタンティノス5世は先述のイエリア教会会議を主催し、ラディカルな聖像破壊政策を推進したため、後代には「^{コプロニモス}糞帝」なる綽名まで冠せられている。このコンスタンティノス5世への言及が見られないことから、ヨアンニスが第三論駁を書いたのは741年までと考えられる。

本書で注目すべきは、それまで曖昧だった「像」概念を整理分類したことにある。早くも第一論駁9～13章にヨアンニスの像理解の根幹をなすコンセプトが記されているが、第三論駁16～26章では像の定義・目的・種類が詳細、かつ体系的に語られている。ヨアンニスはキリストと聖霊を父なる神の本性的な像とし、それ聖人やイコン等を模像として下位に位置づける。

こうした像の分類が、第三論駁27章以下で論じられる、像に捧げられる敬意の区別に至るのは当然の帰結である。ヨアンニスは神にのみ捧げられる絶対的な敬意とし、模像に捧げられる相対的な敬意を厳密に区別した。拙訳でも彼の意図が明確になるように、前者を「崇拜」「礼拝」「崇める」、後者を「崇敬」「敬意」「敬う」「尊ぶ」に類する言葉を使い分けたことに付言しておきたい。

『聖像擁護論』はいずれもヨアンニス自身の論駁とヨアンニスが拠った教父文書からの抜粋によって構成される。抜粋された教父文書は神学的論考、講話、教会史、聖人伝と多岐に及び、とりわけ第三論駁は教父文書からの抜粋が全体の三分の二を越える膨大なものである。この抜粋集は当時の知識人の卓越した読書量と記憶力を如実に表すのみならず、ビザンティン美術史・文化史の貴重な史料集成ともなっている。

翻訳には ed. by P. B. Kotter, *Johannes von Damaskos, Contra imaginum calumniatores orationes tres* (Patristische Texte und Studien, Bd. 17), Berlin/New York, 1975 を底本とし、trans. by A. Louse, *St. John of Damascus, Three Treatises on the Divine Images*, New York, 2003 の英訳を適宜参照した。紙幅の都合で、最もボリュームの多い『第三の論駁』は次号に掲載し、本号では第一・第二論駁のみを所収した。

聖像破壊論者への第一の論駁

(1) 私たちは常に自らをつまらぬものと自覚し、神の前で己の罪を告白すべきである。とはいえ、機が熟したならば、語ることも必要である。神が使徒と預言者に基礎を築き、神の子イエス・キリストを礎石とした教会（エフェ 2.2）が、荒れ狂う海に投げ込まれ、押し寄せる波に打たれ、悪しき霊の攻撃に揺れて苦しんでいることを知っている。不敬な輩がキリストの縫い目のない外衣を切れ切れに裂き、この方の体を八つ裂きにしようとしている。その体とは神なる御言と教会古来の伝統である。ゆえに「怯むことがあれば、その者は私の心に適わない」（ヘブ 10.38）、「迫り来る剣を見て兄弟にこれを告げぬなら、私は彼の血をお前の手に求める」（エゼ 33.8）という聖書の警句に鑑みれば、沈黙を守って口を噤むのは道理に悖るというものだ。懸念は発言を強い、真実は王の力にも優る。私は神の父祖ダヴィデが「私は王たちの前で語ったが、辱められなかった」（詩 118.46）と言うのを聞き、ますます語るようにかき立てられている。王の言葉は臣下には恐ろしい。王の布告を完全に無視する者は稀である。地上の王国が天により統べられていることを知り、諸王の法がいかに支配されているかを知る者もだ。

(2) それゆえ、あくまでも教会の慣習——救いは教会を通じてもたらされる——を護り、なんらかの竜骨や土台として、私の論考を出発点にもってきた。しっかり轡を掛けられた馬を駆り立てるかのよう。私にとって不幸以上の不幸は、恩恵で飾られ、多くの聖人により天から賜った伝統で纏った教会が、貧しき原理に立ち返ることである。そして、何も恐れる必要がない時に恐れなくてはならず（詩 52.4）、あたかも真の神を知らぬかのように偶像崇拜の罟を疑い、僅かなところで完璧さから滑り落ちることである。ひいては並外れて美しい顔に醜い痕を残し、小さな傷により全体の美しさが損なわれるのだ。小さなものが大きなものを生み出すならば、それはもはや小さくはない。それゆえ、教会の伝統を少しでも揺るがすことも小さなことではない。その伝統は先人から伝えられた。私たちは彼らの行為を見つめ、彼らの信仰を範とすべきである。

(3) よって、まず全能の主に懇願しよう。私たちが語ることに、主の前では全てが明白で開かれており、私の慎ましき意図が純粹で、その目的が純真なこともご存じである。私が口を開くときには言葉を与えてくださいますように。私の知性の手綱を手ずから取られ、ご自身の方へと引き寄せ、あなたのいますところへまっすぐな道を進ませてくださいように。魅惑的な右に傾くことも、公然たる左を知ることもないようになしてください。神とともに、全ての神の民に、

聖なる御国に、王国の聖職者に、そしてキリストの精神的な群れの善き牧者——この方はキリストの定めた位階を体現していらっしゃる——とともに、善意をもって私の論考を受け入れて下さるようお願い申し上げます。私自身が自らの至らなさを痛感しているのだから、私のつまらなさを気に掛けたり、私の言葉に雄弁さを求めたりしないでいただきたい。むしろ、私の討論の力——天の王国は言葉ではなく力にある（一コリ 4.20）——を考慮していただきたい。私の目的は勝つことなく、真実のために戦う手を挙げることである。その手は自由な意志の力に支えられている。御自身が真理たる方の助力を請いつつ論考を始めよう。

（4）私は偽りのない〔神の〕言葉を心に留める。「主、あなたの神は唯一の主である」（申 6.4）、「主、あなたの神を畏れ、主のみを崇めよ」、「あなた方に他の神々はない」（申 6.13）、「上は天にあり、下は地にあるものの、いかなる像も作ってはならない」（出 20.4）、「彫像を崇める者、偶像を誇りとする者は全て辱められる」（詩 97.7）。「天と地を造らなかった神々は、地の上、天の下から滅び去る」（エレ 10.11）、「神はかつて預言者を通して父祖に語られたが、この終わりの時代には、生まれた独り子——この方を通して神は世界を造られた——を通して私たちに語られた」（ヘブ 1.1-2）。

こう言われた方も知っている。「永遠の命とは、唯一にして真の神なるあなたとあなたが遣わしたイエス・キリストを知ることである」（ヨハ 17.3）。私は唯一の神を信ずる。神は万物の源、始めなく、造られず、不死にして不滅、永遠で終わりなく、無限にして体なく、不可視にして象られず、形を取らない。唯一の超本質的な存在、父、子、聖霊、三つの位格をとる神性を越えた至高の神である。私は神のみを崇拝し、神のみに礼拝の祈りを捧げる。私が崇拝するのは唯一の神、唯一の神性、父なる神、受肉した子なる神、聖霊なる神の三つの位格、その一なる神である。私は創造主の代わりに被造物を崇めはしないが、私のように象られ、〔神性を〕弱めたり、減じたりせず被造物となられた創造主を崇拝する。この方は私たちの本性を栄光の内に高められ、神なる本性を分け与えてくださった。私は王たる神とともに肉体という紫衣も崇めるが、その肉体は外套でもなく、四つ目の位格でもない¹——そんなものは去ね。神と等しくあり、それゆえに変わることなく聖別されたものである。

神性の一部となっても肉の本性は神性にはならない²。しかし、受肉した御言^{ロゴス}がかつての性質を保つと同じで、御言となった肉もその性質を失うことなく、むしろ位格において御言と同一になる。それゆえ、私は敢えて不可視の神を、目に見えぬ形ではなく、私たちのために肉体と血を備える（ヘブ 2.14）がゆえに目に見えるようになった姿で描くのだ。私は不可視の神性を像にするのではない。肉において可視となった神を像にするのである。もし魂を描くのが不可能なら、魂に生命を与えられる神を描くことはなおさら不可能なのではなかろうか。

¹ ネストリウス派への反論。

² 単性論への反論。

(5) だが、神が律法者モーセを通じてこう命じたと言う者がいる。「あなたの神、主を畏れ、主のみに仕えなさい」、「上は天にあり、下は地にあるものの、いかなる像も作ってはならない」と。兄弟よ、「文字は殺すが、霊は命を与える」(二コリ 3.6) という聖書の言葉を知らぬがゆえに、彼らは真に道を失っている。彼らは文字の下に隠された霊を見いだそうともしない。私はこれらの人々に高らかに言おう。あなた方にこのことを教えた人はあなた方にこうも教えたのだ。申命記においてかく述べる時、立法者がどう解したかを学びたまえ。「主は火の中からあなた方に語りかけた。あなた方は主の語りかける声を聞いたが、何の形も見なかった」(申 4.12)。すぐ後に「気をつけてあなた方の魂を保ちなさい。主がホレブで火の中から語った日、あなた方は何の形も見なかった。騙されて自分のためにいかなる彫像も像も作らぬように。男や女の形も、地上にあるいかなる獣の形も、天の下に飛ぶいかなる鳥の形も」(申 4.15-17) とある。また「目を上げて天を仰ぎ、太陽や月、天空のあらゆる星を見て、誤りに惑わされ、崇め仕えぬように」(申 4.19)。

(6) ご明察の通り、目的は一つである。創造主の代わりに被造物を崇め、礼拝してはならない。礼拝の敬意は創造主ただ一人に捧げなければならない。それゆえ、神に崇拝を捧げることにについてそこかしこで言及されている。再びこう述べる。「あなたには私の他に神があってはならず、自分のために彫像やいかなる像も作ってはならない。それらを崇めたり、敬ったりしてはならない。私は主、あなたの神である」(申 5.7-9)。そして、こうも述べる。「祭壇を壊し、石柱を砕き、聖なる木立を切り倒し、神々の彫像を火にくべ、他の神を崇めてはならない」(出 34.13-14)。そしてまたこうも言う。「あなたは鑄像の神々を作ってはならない」(出 34.17)。

(7) ご覧なさい。神は偶像崇拝ゆえに像を作ることを禁じており、計り知れず、象られず、目に見えない神の像を造るなどできようはずがないのである。「あなた方は主の語りかけられる声を聞いたが、何の形も見なかった」(申 4.12) のだから。また、パウロはアレオパゴスの丘の真中でこう仰せになった。「私たちは神の裔なれば、神を金、銀、石、彫刻、人の手になるものと同じものと思ってはならない」(使 17.29)。

(8) ユダヤ人は偶像崇拝に堕したがゆえにこうした戒めを与えられた。しかし、私たちの場合、神学的に言えば³、迷信の過ちを避け、真に神とともにあるようになった。私たちは真理に気づき、神のみに仕え、神についての知の完成を味わい、幼年期が過ぎて青年となった(エフェ 4.13-14)。もはや養育係の下にはいないのだ(ガラ 3.25)。神より区別する力をいただき、像にできるものと像でも描けぬものを知っている。

聖書に曰く、「あなたは私の形を見ることはできない」(出 33.20)。立法者の知に幸いあれ。ど

³ ナツィアンゾスのグリゴリオス『第39講話』8, 1-2。Ed. by C. Moreschini, *Discours 38-41, Sources chrétiennes* (hereafter SC) 358, Paris, 1990, p. 162.

うすれば不可視なるものを像にできようか。どうすれば思い描けないものを像にできようか。どうすれば限定されず、計り知れず、無限なるものを絵に描けようか。どうすれば形なきものを形づくれようか。どうすれば肉体なきものを彩れるのか。神秘的に開示されるものは何だろうか。あなたが人となった神を観想する時、人の姿をした神を思い描いているのは明らかだ。不可視なるものが肉において見えるようになった時、あなたは目に見える姿を似姿に描くことができるのだ。ご自身の無限なる本性において体なく、形なく、計り知れないもの、つまり神の姿で存在するものはご自身を無とされて、本質的にも身体的にも僕の姿を取られ（フィリ 2.6-7）、肉体を帯びる。その時こそ見られるべく示されたものを板に描き、衆目に示すことができるのだ。

えも言われぬ遙りを描きたまえ。乙女からの誕生を、ヨルダン川での洗礼を、タボル山での変容を、我らを苦しみから解き放つ受難を、神の力の徴たる奇跡を。彼は神の力により肉体の内にそれらを行ったのだから。救いの磔刑を、墓所を、復活を、天国への昇天を。その全てを言葉でも絵の具でも描くがよい。

恐れてはならない。不安を覚えてもならない。私は様々な敬意があることを弁えている。墓にしようとして洞窟を二つ買い求めた際、アブラハムは信仰も神の知識も持たぬハモルの子らに挨拶をした（創 23.7、使 7.16）。ヤコブは兄エサウの前で、また彼の息子ヨセフの杖の先で地に挨拶をした（創 33.3）。彼は敬意を払いはしたが、崇拝したわけではない。ヌンの子ヨシュアとダニエルは神の御使いの前で敬意を払っておじぎをしたが（ヨシュ 5.14）、彼らは御使いを崇めたわけではない。崇拝と卓越した者を讃えるために捧げられるものとは別物であるからだ。〔≒3.8〕⁴

(9) 像と崇拝について話しているのだから、それぞれの正確な意味を吟味しよう。像とは原型の特徴を写し取った類似物であるが、原型と何らかの相違がある。像はあらゆる点で原型と類似するのではない。御子は不可視の神の生きた、本性的な、まさによく似た像である（コロ 1.15）。自らの内に父のすべてを受け継ぐ〔御子は〕、生まれたという一点を除けば、あらゆる点で神と同一である。起因たることが父の本性であり、子は結果である。父は子から生まれず、子が父から生まれる。父により生まれ、父に続くのであれば、父が子を生んだのである。

(10) 神においても像があり、神により来たるべきものの模像がある。それらは永遠に先立つ神の意志であり、常に変わることはない。神的なものはあらゆる点で不変であり、神においては移り変わりも移ろう影もない（ヤコ 1.15）。神的なもの、神の内にあるもの、神にまつわることを熟知した聖ディオニシオス⁵はこのように述べる。これらの像と摸像は予め定められている。

⁴ 本書にはそれぞれの論駁の間に重複箇所があるが、ヨアンニスが論考を重ねる過程で推敲しているため、拙訳では重複を省略しなかった。本稿では重複箇所が全く同一の場合は〔＝ 巻・章〕、推敲されている場合は〔≒ 巻・章〕と表記した。

⁵ 擬ディオニシオス・アレオパギティスのこと。『聖像擁護論』でも随所で引用される、いわゆるディオニ

家を建てようする者が最初に考えに沿って「家の」形を思い描くように、神が予定し、予定通りに起こる万象はそれが起きる前に神の意志において具体的な姿形を与えられるのである、と⁶。

(11) また、目に見えず、形ないものの像もある。それは漠然と理解されるものを肉体的に描き出す。聖書は神と天使に形を与えた。神にも紛う先の聖者はその理由を以下のように説明している⁷。形なきものの形、姿なきものの姿が像によってもたらされたのは、我らの類似では直接的に知性による観想へと高められないので、親しみがあり自然な像が必要になったということだけが理由なのではないと述べる者もあろう。神なる御言^{ロゴス}が私たちが類似を「必要としていることを」予知し、そこかしこで我々を高めるものをもたらし、そして単純で形なきものに何らかの形を充てると仮定しよう。ならば、我らの本性と合致する姿で形づくられ、そう望まれるものをどうして描いてはならないことがあろうか。それが不在ゆえに見られないとしても。

感覚を通じてある幻想が前頭部で構築され、認識能力へと伝達され、記憶に保存される。それゆえ、神の語り部グリゴリオスは、知性は全ての有形物を通り過ぎようとして疲れ果てその無力さを悟ると述べる⁸。しかし、「世界が造られた時から、目に見えない神の本性は造られたものを通して知ることができる」（ロマ 1.20）。私たちは神的なものの微かな現れを暗示する被造物の内に像を見るからだ。私たちが始まりに先立つ聖三位一体について語るとき、太陽と光と光線、湧き出す泉と流れ出す川と奔流、精神と言葉と霊、バラの木と花と香りといったイメージを用いて表現している。

(12) また、謎めいた形でやがて起こることを描き出す未来の像もある。例えば、「契約の」聖櫃（出 25.10-16）は「アロンの」杖（民 17.8）や「マナの」壺（出 16.33）のように聖処女、神の母を予示する。「青銅の」蛇（民 21.8）は邪な蛇が原初に噛んだ傷を十字架によって癒した方を、水、海、雲は洗礼の聖霊を予示する（一コリ 10.1）。

(13) さらに、過去を起きたことを表す像もある。何らかの奇跡、誉れ、恥、美德、悪徳の記

シオス文書の著者。500 年頃に活動したと考えられている。著者が自らを使徒行伝 17.34 で言及されるアレオパゴスのディオニシオスと呼ぶため、現在もこの名で呼ばれる。アンティオキアのセヴェロスやイペリンのペテロス等が想定されてきたが、真の著者は不明である。Eds. by A. Kazhdan et al., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, vol. 1, New York/ Oxford, 1991 (hereafter ODB), pp. 629-630.

⁶ 擬ディオニシオス・アレオパギティス『神名論』5.8。Ed. by B. Suchla, *Corpus Dionysiacum*, vol. 1, PTS 33, Berlin-New York, 1990, p. 188.

⁷ 擬ディオニシオス・アレオパギティス『天上位階論』1.1.3。Ed. by G. Heil, *Corpus Dionysiacum*, vol. 2, Berlin-New York, 1991, pp. 8-9.

⁸ ナヅィアンゾスのグリゴリオス『第 28 講話』13。Ed. by P. Gallay, *Discours 27-31 (Discours théologiques)*, SC 250, Paris, 1978, p. 128.

念であり、後にそれらを見る者のために、それゆえに彼らは悪しきものを避け、善きものを熱望するようになる。この種の像は二種類ある。神が石板に律法を刻み、神に愛された人々の生涯を記録するよう命じたように、一つは聖書に書かれた言葉である。壺と杖を記念に聖櫃に納めるよう命じたように（出 34.28、ヘブ 9.4）、視覚を通じて見られるものである。かくして、過去の像と美德を心に銘記するのである。あらゆる像を打ち壊し、かくあれかしと命じられた方に背いて法を定めるか、双方をそれぞれに相応しい道理と仕方で受け入れるかのいずれかなのである。各種の像について議論をしたので、次に崇拜について話すこととしよう。

(14) ^{プロスキネシス}崇敬とは服従と栄誉の徴である。そして、我々はその様々なあり方を知っている。第一は^{ラトリア}崇拜である。我々は敬意に相応しい本性によってのみ神へと捧げる。次に、本性的に敬われる神ゆえに、神の友や僕に捧げられる崇敬がある。ヌンの子ヨシュアとダニエルは天使を崇敬した。ダヴィデが「私たちはこの方の御足が置かれる所に伏し拝もう」（詩篇 131.7）と言うように、神の場所に捧げられる場合もある。イスラエルの民が幕屋とそれを取り囲むエルサレムの神殿を敬い、彼らが今なおそうする如く、いたる所からそこに敬意を示していたように、神に捧げられたものに捧げられる場合もある。またヤコブが神により兄とされたエサウ（創 33.3）、神により主人となったファラオ（創 47.7）を敬い、兄弟がヨセフを敬ったように（創 50.18）、神によって長に任じられた者に捧げられる場合もある。このような敬意はアブラハムがナホルの子ら敬ったように（創 23.7）栄誉の徴として他者にも示される。それゆえ、しかるべき理由と仕方で、完全に崇敬を拒むか、受け入れるかしたまえ。

(15) この問いに答えなさい。神は唯一の神か。あなたはこう答えるだろう。「ええ、唯一の法の与え主でしょう」と。では、なぜ神は矛盾したと定めているのだろう。ケルビムとて創造の業の埒外にはない。では、なぜ神は贖いの座を覆い隠すために人の手によりケルビムを彫るよう定められたのか。神は輪郭づけられず、思い描けないので、さらに被造物を神として礼拝に用いないように、神や神のようなものの像を作ることが不可能なのは明らかだ。ケルビムは輪郭づけられるがゆえに、神は贖いの座を覆うために神の玉座に平伏す彼らの像の制作を命じられたのだ。神の神秘的な像は天上の僕像で覆われるのが相応しいからだ。

聖櫃や壺、贖いの座について、あなたは何と言うだろうか。それらは手作りではないのか。人の手によるのではないのか。あなたの言うように、卑賤な物質で作られてはいないのか。幕屋全体についてはどうだろう。それは像ではないのか。それは影でも写しでもないのか。それゆえ、神々しき使徒は律法に則って作られた聖なる物についてこう述べる。「祭司たちは天にある聖所の写しと影に仕え、それはモーセが幕屋を建てようとした時に神に導かれて言った。『見よ、山で示された型通りに全てを作れ』」（ヘブ 8.5）。

しかし、律法は像ではなく、像を予示する影である。ゆえに、同じ使徒はこうも言っている。「律法にはやがて来るよきことの影があるが、その実像はない」（ヘブ 10.1）。それ自体が前もって像

を描いたものであるにもかかわらず、律法が像を禁じているならば、私たちは何を言えようか。もし幕屋が影や形象の継承でなければ、どうして律法は像を造るべからずと命じえようか。しかし、実際にはそうではない。全くもってそうではない。むしろ、「何事にも時がある」のだ(コヘ3.1)。

(16) かつて、体をもたず、形のない神は決して描かれなかった。しかし今や神は肉において見られ、人々と交わったがゆえに、私は私が見た神を描く。私は物質を崇めるのではない。物質の創造主、私のために物質となられ、物質に住まうことを決し、物質を通して私の救済を成就された方を崇拝する。私は物質を敬うのを断じてやめはしない。まさに物質を通じて私の救いがなされたのだから。しかし、神として敬っているのではない——とんでもないことだ。どうして無より生まれたものが神となりえよう。神の肉体が位格的な一致によって変わることなく神になったとしても、油を注ぐものは残り、理性と知性を備えた魂に命を吹き込まれた本性的に肉であったものは作られたのであり、被造物以外の何者でもない。

私は他の物質を敬い、私の救いをもたらしたものに敬意を抱く。それが神の作用と恩寵に満ちているからだ。何にもまして尊く幸いなる十字架の木は物質ではなかったか。聖にして厳かな山、髑髏の場 [=ゴルゴタ] は物質ではなかったか。生命を与え、命を生み出す岩、私たちの復活の源たる聖墳墓は物質ではなかったか。いとも聖なる福音の書物やインクは物質ではなかったか。生命のパンを供する祭壇は物質ではなかったか。金や銀は物質ではなかったか。それらから十字架、絵画、杯を造るのだ。これらの何にも増して、我が主の肉体と血は物質ではなかったか。これらの全てに対する敬意と崇敬を捨て去るか、教会の伝統に従い、神とその友の像——名によって浄められ、それゆえに聖霊の恩寵に覆われている——を認めるかしたまえ。物質を賤しめてはならない。神によるもので貶めてよいものは何一つない。それはマニ教徒の考えである。賤しむべきは神に起源を持たぬものだけである。すなわち、私たちの意志が自然なものから不自然なものへと傾き、曲がることで私たち自身が見いだしたもの、つまり罪がそれである。

あなたが律法ゆえに像を蔑み、物質から形づくられたとしてこれを禁じるならば、聖書の語るところを見るがよい。「主はモーセにこう仰せになった。見よ、私はユダ族のフルの息子ウリの息子ベツェルエルを名指しで呼んだ。彼を知恵の神霊を満たし、どのような工芸においても知識を与え、金、銀、青銅、藍玉、紫斑岩、緋色の毛糸による細工と意匠を行い、石工、木工、全てにおいて働けるようにした。私はダン族のアヒサマクの子オホリアブも与えた。わたしはそれらのすべてに知恵を授けた。彼らはわたしがあなたに命じたもの全てを作るだろう」(出31.1-6)。そしてまた「モーセはイスラエルの子の集まり全体に告げた。『主が命じられた言葉を聞け。主はこう仰せられた。あなた方の持ち物から、主に供物を捧げよ。心広き者はそれを主に初穂を捧げよ。すなわち金、銀、青銅、藍玉、紫斑岩、緋色の毛糸、亜麻糸、山羊の毛、赤く染めた羊の毛皮、藍玉で染めた皮、アカシヤ材、塗油用の油、薫りよき香料、彫刻、肩当てや外套を飾る貴石である。あなた方のうち心聡き者は来たりて、主が命じられたものをことごとく、つまり幕屋を造るべし』」(出35.4-10)。そして他の話の後にこうある。「彼らはエメラルドの石を繋ぎ止め、

黄金で縁取り、印章を彫るように彫りつけた」(出 39.6)。また「これらの宝石はイスラエルの子らの名を表して十二個あり、それぞれの宝石には十二部族に従ってそれぞれの名が印章に彫るように彫りつけられた」(出 39.14)。その前にはこうある。「彼は亜麻の縊り糸、青、紫、緋色の毛糸から証人の幕屋の布を作り、ケルビムの模様を織り上げた」(出 36.8)。さらに「聖櫃に被せる蓋を純金で作し、二体のケルビムを作った」(出 37.6)。

見よ、尊き物質を、あなたが蔑んでいるものを。染められた山羊の皮よりつまらぬ物は何か。青、紫、緋色は単なる色ではないか。見よ、ケルビムの像を。あなたはどのようにして律法が作ることを命じるものが律法により禁じられていると言えるのか。もし律法ゆえに像を禁じるのならば、あなたが安息日を守り、割礼を受けているかを顧みるがよい。律法はこれらのことを断固として命じている。もしあなたが律法を守るなら、「キリストはあなたの役に立たなくなる。律法により義とされようとするならば、恩寵から転落する」(ガラ 5.2,4)。かつてのイスラエルは神を見ることはなかった。「私たちは顔の覆いを除かれて、神の栄光を見る」(二コリ 3.18)。

(17) 私たちはいたるところで感覚を用いて受肉した神の像を作り出す。ちょうど言葉によって聴覚が聖化されるように、私たちは感覚の中で第一のもの——視覚こそ感覚の第一のものである——を神聖なものに見なす。像が記憶であるからだ。まさに書物が文字を解する人々に説くことを、図像は文盲の人々に説く。言葉が聴覚に訴えるように、像は視覚に訴え、理解される。ゆえに、神は命じられたのだ。聖櫃を朽ちない木で造って外と内に金箔を被せ、石板、杖、マナを入れた金の壺を中に納めるように、と。これは既に起きたことを記念し、これから起きることを予示するためでもあった。

これらの像が響き渡る先触れでないと言う者があろうか。それら[の像]は幕屋の脇ではなく、まさに民の眼前に置かれた。それゆえにこそ、それらを見た人々はそれらを通して業なした神に崇敬と礼拝を捧げたのである。彼らが像を崇拜していたのではないことは明らかだ。そうではなく、像によって、人々はかつての奇跡を想起し、奇跡をなした神を敬うように導かれたのだ。像は想起のために設けられた。それは神としてではなく、神の業を想起するよう導くものとして讃えられたのである。

(18) 神はヨルダン川から十二個の石を取ってくることを命じ、理由を説明してこう仰せになった。「あなたの息子が、これらの石は何を意味するのですかと尋ねる時、ヨルダン川の水がいかにして神の命により引き、主の聖櫃と全ての民が渡ったのかを話して聞かせられるように」(ヨシュ 4.6-7)。では、私たちの息子が「これは何」と尋ねる時のために、どうして私たちのために苦しまれた神キリストの救いと奇跡を描かずにおられよう。神の御言は人となり、この方を通してイスラエルはヨルダンを渡ったのみならず、私たちの本性全てが原初の幸福を取り戻した。そして、この方を通して、人間性は地の最も低きところからあらゆる王国を越えて昇り、まさしく父の玉座に坐したのである。

(19)しかし、こういう者もいる。キリストと神を生まれたこの方の母の像を作れ、それで十分だ、と。何と愚かな。あなたは自ら聖人の敵と声高に白状しているのだ。キリストの像を作って聖人の像を作らないなら、あなたが像ではなく聖人への讃美を禁じているのは明らかだ。このようなことはいまだかつて誰も試みたこともなく、かくも厚顔に企てたこともない。讃美されるものとしてキリストの像を造りながら、聖人の像を栄光なきものと拒むのは、真実を偽りとして示そうとする企てに他ならない。主は仰せになる。「なんとまあ、私を讃える者を私は讃える」(サム上 2.30)。神々しき使徒はこのように書いている。「あなたはもはや奴隷ではなく息子である。息子であれば、キリストを通じて神の世継ぎである」(ガラ 4.7)。そしてまた「[キリストと]ともに苦しむなら、ともに讃えられる」(ロマ 8.17)。

あなたが戦いを挑んでいるのは像ではなく聖人自身である。それゆえ、キリストの胸に緋った神学者ヨハネは「我々は御子に似た者になる」(一ヨハ 3.2)と述べたのだ。火に投げ込まれた鉄は本性ではなく、結合し、燃焼し、関与することで火になる。同様に、神格化された者は本性ではなく関与によって神となるのである。私は受肉した神の御子の肉について話してはいない。それは位格的な一致と神性への関与によって変わることなく神と呼ばれるからである。それぞれの預言者のように神の力ではなく、聖別する方が完全に存在することで聖別される。神化によって聖人は神になるがゆえに「神は神々の集いに立ち、神々を見分ける」(詩 81.1)と言われる。神学者グリゴリオス⁹が解釈するように¹⁰、神は神々の間に立ち、それぞれの価値を弁別するのである。

(20) 神はダヴィデに彼の子ソロモンを通じて神の住まう神殿を建て、安らげる家を準備せよと命じられた。列王記が伝えるように、ソロモンは神殿を建立し、ケルビムの像も作った。そして、ケルビムも金で覆い、内側も外側も壁一面にケルビムと不死鳥の浮彫を施した(列上 6.28-29)——曰く、傍らではなく「一面に」。さらには雄牛や獅子、柘榴の像も。主の住まう館の壁は獣や草木より聖人の姿を描かれている方がより一層立派になるのではなかろうか。一体どこで律法が「いかなる像も作ってはならない」と断じていたのだろうか。知恵に満つソロモンは神の像を作らず、ケルビムや獅子や雄牛の像を作った——律法が禁じていたからである。私たちも神を描かず、聖人の似姿を描けばよいではないか。かつて神殿と民は獣の血と雌牛の灰によって浄められていたが(ヘブ 9.13)、今や「ポンティオ・ピラトを証人とし」(一テモ 6.13)、自らを殉教

⁹ ナヅィアンゾス主教(在位 382～384 年)。バシリオス、ニッサのグリゴリオスとともにカッパドキア三教父の一人に数えられる。バシリオスとともにアテネで学び、第 1 コンスタンティノポリス公会議(381 年)では議長を務めた。正教会で「神学者」の尊称で呼ばれるのは、福音書記者ヨハネ、新神学者シメオンと、ナヅィアンゾスのグリゴリオスの 3 人のみである。ODB, vol. 2, pp. 880～881.

¹⁰ ナヅィアンゾスのグリゴリオス『第 40 講話』6.24-25。Moreschini, p. 208.

者の初穂と示されたキリストの血によって浄められているからである。そして、今なお教会は聖人の血によって建てられている。かつて神の家は理性なき〔獣〕の図像や彫像で飾られていたが、今は自らを霊において生ける神の生きた理性的な神殿にすべく備えてきた聖人によって飾られているのである。

(21) 私たちは王や主キリストをこの方の軍勢を奪うことなく描く。というのも、聖人が主の軍勢であるからだ。主から主の軍勢を剥奪する前に、地上の王こそ軍勢を捨て去るべきだ。王に紫衣と王冠を捨てさせてから、かくも勇敢に僭主と戦い、苦難に勝利した人々を捨てさせよ。聖人が神の世継ぎ、キリストの共同相続人、神の栄光と王国に参加する者であるなら、どうしてキリストの友も地の栄光に関与できないのか。神は言う。「私はあなた方を僕とは呼ばない。あなた方は我が友である」(ヨハ 15.14-15)。私たちは教会が与えた栄光を聖人から剥奪すべきではなかろうか。何たる軽率、何と恐れも知らぬ考えだ。神と争い、神の命に服するのを拒むとは。あなた方は像を敬わず、神の御子も敬わない。この方は生きた「目に見えぬ神の像」(コロ 1.15)にして区別のつかぬ似姿であるというのに。

私は受肉した神、キリストの像を敬う。神の御子の母として万人の女王たる生神女(テオトコス)の像を、神の友として聖人の像を敬う。聖人は血をもって罪に抗い、彼らのために自身の血を流された方のために自らの血を流してキリストに倣い、キリストの足跡を辿りながら生きたからである。私が彼らの偉業と受難を記すのは、それらを通して聖別されたからであり、懸命に働かんとする励みとするためである。私はそれらを敬意と崇敬ゆえに行う。「像への敬意は原型にもたれされる」¹¹と、神の如きバシリオス¹²は言う。神の聖人のために神殿を建てるならば、同様に彼らの戦勝碑も建てたまえ。

古来、神殿は人の名において建立されたことはなく、義人の死も祝福されなかった。彼らは埋葬され、モーセ自身もそうであったように、亡骸に触れた者は誰であろうと不浄とされた。今や聖人の記憶は祝福されている。ヤコブの亡骸は悼まれ、ステファノの死は讃えられた。それゆえ、かつての律法に反する聖人を讃える記念碑をあきらめるか、あなたが言う律法に反する像を受け入れるかしたまえ。しかし、聖人の記念碑を讃えずにはいられまい。なぜなら、聖なる使徒と神を担う教父がそうするよう命じているからだ。

神なる御言葉は肉となり、罪を除いてあらゆる点で私たちと似た者となり、混合せず我らのものと一致し、神性と肉を混合させずに有することで肉を変わることなく神化した。その時より、

¹¹ バシリオス『聖霊論』18.45. Ed. by B. Pruche OP, *Sur le Sainte-Esprit*, SC 17bis, Paris, 1968, p. 406.

¹² ケサリア主教(在位 370～379年)。ナゾリアンゾスのグリゴリオスやニッサのグリゴリオスとともにカッパドキア三教父の一人に数えられる。第1回コンスタンティノポリス公会議(381年)において三位一体論の確立に貢献した。彼の著した『修道士大規定』は現在でも正教会の修道生活に影響を持つ。バシリオス典礼の聖体礼儀は彼に帰せられているものの、実際には6世紀に成立したと考えられている。ODB, vol. 1, pp. 269-270.

我々は真に聖なるものとされた。神の御子、神性において苦しまぬ神が纏われたものゆえに苦しまれ、私たちのために尊く素晴らしい代価を払って私たちの負債を返してくださった——御子の血は父への訴えであり、尊ぶべきものだから。その時より、私たちは真に自由になった。神が冥府に降り、そこで囚人として永遠に繋がれていた魂に赦しを伝え——盲人に視界を授けたように——、卓越した力で強き者を縛り上げて再び立ち上がり、私たちから引き受けた肉を不朽のものとされた。その時より、私たちは真に朽ちぬものとなった。そして、私たちが水と聖霊から生まれた時より、私たちは真に子となり、神の世継ぎとなった。この時より、パウロは信仰篤き人々を聖と呼ぶ（一コリ 1.2）。この時より、私たちは聖人を悼まず、その死を祝っているのだ。この時より、「私たちは律法ではなく恩寵の下におり」（ロマ 6.14）、「信仰によって義とされた」（ロマ 5.1）。唯一にして真の神を知っているのだから——「律法は正しいものに与えられているのではないから」（一テモ 1.9）——、私たちはもう子供のように律法の要素に隷属していない。私たちは完全に青年期へと立ち戻り、確かな食物に養われているので、もはや偶像崇拜に堕することもない。

律法は荒野に輝く灯火のようによきものだった。しかし、それは夜が明ける時までのことである。既に私たちの心には明星が上り、神智の流水が国々の海を覆い、いまや万民が主を知っている。「古きものは去り、見よ、全てが一新した」（二コリ 5.17）。聖なる使徒〔パウロ〕は至高なる使徒の長ペトロに「あなたがユダヤ人でありながら異邦人の如く暮らしているなら、どうして異邦人にユダヤ人のごとく暮らすよう強いれましょうや」（ガラ 2.14）と言った。また、ガラテヤの信徒にはこのようにも書いている。「割礼を受ける人全てに宣言しよう。かような人は律法全てを行う義務がある」（ガラ 5.3）。

(22) 古来、神を知らぬ人々は本性により神々ではないものに仕えてきた（ガラ 4.8）。しかし、今は神を知り、いや、むしろ神により知られているのに、なぜあの無力で頼りにならない諸霊の下に再び戻ろうとするのか（ガラ 4.9）。私は人の形となった神を見たので「私の魂は救われた」（創 32.31）。私はヤコブが見たように、しかし別の方法で神の像を見る。彼は非物質的な像を見て、知性の非物質的な目にやがて来るものを前もって告げた。

これに対して、私は肉において見られた方の像を見て、記憶を燃え上がらせる。使徒の影、その手拭いや前掛けは病を癒し、悪霊を敗走させた（使 5.15）。ならば、どうして聖人の影や像が讃えられずにおられよう。全ての物質的なものへの崇敬を廃するか、新説を唱えるのをやめるかしたまえ。「古き境を移してはならない、あなたの父祖が定めたのだから」（箴 22.28）。

(23) 教会の慣習は書物のみならず、文書によらぬ形でも伝えられている。神の如きバシリオスは『聖霊論』全 30 章の第 27 章においてアンフィロキオス¹³に以下のように述べた。一言一句

¹³ イコニウム主教（在位 373～394? 年）。ナツィアンゾスのグリゴリオスの従兄弟と目される。

正確に引用しよう。

教会に保存されている教義と講話の中で、文書から伝えられるものもあれば、使徒の伝統から密かに伝授されるものもある。双方とも信仰に導く同等の力を有する。教会の慣習に未熟な者はこれらに異を唱えられまい。なぜなら、もし諸々の慣習の中で文書によらぬものを権威不十分として退けるなら、我らは気づかぬうちに福音を損なうことになるのだ¹⁴。

これが大バシリオスの言葉である。さすれば、どのようにして私たちは聖なる髑髏の場、生命の記念碑を知ったのか。子は書かれたものもなく父からそれを習ったのではなかろうか。確かに主が髑髏の場で磔にされ、[アリマタヤの] ヨセフが掘り出した墓に埋められたことは書かれている。しかし、これらが今日崇敬される場所であることを私たちが知っているのは書かれていない伝統によるのである。これに類する例は数多ある。三度[浸水する]洗礼の起源は何か。東へ向いて祈るのは、秘蹟の伝統はどこから来たのか。ゆえに、聖なる使徒はこう言うのである。「だから、兄弟よ、私たちによって、それが口から発した言葉であっても、手紙であっても、教えられた伝統を固く守り続けなさい」(二テサ 2.15)。教会においては、こうしたものが多く文書によらぬ形で受け継がれ、今なお保持されているのに、あなたはなぜ像について無用な詮索をするのか。

(24) あなたが言う慣習は私たちの像への崇敬を忌むしいものとはしない。神を作る異教徒^{ἑτεροῦλον}のそれが忌まわしいのだ。異教徒の悪用を理由に、私たちの敬虔な慣習まで廃する必要はない。魔法使いや魔術師は悪魔払いを行い、教会も洗礼志願者から悪霊を払う。しかし、彼らが悪霊を召喚するのに対し、教会は悪霊に対して神に頼む。異教徒は悪霊の像を捧げ、教会は受肉した神の、神の僕と友の像を捧げ、悪霊の軍勢を追い払うのである。[≒ 2.17]

(25) もし神々しく感嘆すべきエピファニオス¹⁵がこれらの像を禁じているのが明らかだと言うなら、最初に件の著作は偽書、かつ捏造であろう。それはある人の著作が別人の名前で広まっているにすぎず、こうしたことはしばしば起こるものである。

第二に、私たちは祝されたアタナシオス¹⁶が聖人の遺物を棺に納めることに異を唱え、むしろ地の下に埋葬するよう命じたことを知っている。それはエジプト人の馬鹿げた習慣を廃そうと望

¹⁴ バシリオス『聖霊論』27.66. Pruche, pp. 478-80.

¹⁵ キプロスのサラミス主教(在位 367～403 年)。皇帝テオドシオス 1 世(在位 379～395 年)に聖画像のついた緞帳を撤去して帷子にすること、壁画を漆喰で覆うように勧めたとされる。ODB, p. 714.

¹⁶ アレクサンドリア主教(在位 328～378 年、追放による中断あり)。第 1 ニケア公会議(325 年)に輔祭として出席し、アリオスの説を退け、三位一体論の形成に貢献した。ODB, vol. 1, pp. 217～218.

んだがゆえであるが、エジプト人は死者を地に埋めずに寝台や寝床に置いていたのである。では、仮に例の著作が大エピファニオスの著作だと認めるなら、彼は像の制作を禁ずることで同様の慣習を正そうとしていたことになる。しかしながら、聖なるエピファニオス自身の聖堂に彼の目的が像の廃止になかった証拠がある。というのは、[彼の] 教会が私たちの時代まで像で飾られていたからだ。〔≒ 2.18〕

第三に、孤立した例は教会の法たりえない。神学者グリゴリオスが述べるように、「燕一羽では春にならない」¹⁷ のは真実に思われる。一つの言葉が全教会の伝統を覆すことはできない。それが地の端から端まで広がっているためである。

(26) 聖書と教父の慣習を受け入れたまえ。聖書が「国々の偶像は金や銀であり、人の手によるもの」(詩篇 113.12) と言うのは、命なきものや人の手になるものではなく、ただ悪霊の像を敬うことを禁じているからである。

(27) それゆえ、こうも言われる。預言者が天使、人間、王、罪深い人、杖にさえ敬意を払った、と。ダヴィデは「神の足台にひれ伏せ」(詩篇 98.5) と述べ、神と語らうイザヤは「天は我が玉座、地は我が足台」(イザ 66.1) と言う。蓋し、天と地も創られたことは衆目に明らかだ。モーセやアロンもまた、全ての民と共に、人の手になるものにひれ伏した。教会の金蟬たるパウロはヘブライ人への手紙でこう述べる。「キリストは、人の手によらぬ、すなわち創造によるのではない、一層大きく完全な幕屋を通して来るべき善きものの大祭司としていらした」(ヘブ 9.11)。さらにまた、「キリストは真のものの写しにすぎぬ手で作られた聖所ではなく、天に入られた」(ヘブ 9.24)。このように、前者の聖所、すなわち幕屋と中にある一切のものは人の手により作られた。それが崇敬されることを否定する者はいない。

(28) 聖ディオニシオス・アレオパギティス『ティトスへの手紙』¹⁸ より。

群衆がそれらに抱く偏見に反して、我々は聖なる象徴への聖なる旅をなさねばならず、これらを貶めてはならない。[これらは] 神の徴の所産にして印章であり、本性を超えた、言い尽くせぬ幻想の像を明示するのだから。〔= 2.24〕

(29) 註——彼が讃えられるものの像を嫌悪すべきでないと言っているのを見なさい。〔= 2.25〕

¹⁷ ナツィアンゾスのグリゴリオス『第 39 講話』14。Moreschini, p. 182.

¹⁸ 擬ディオニシオス・アレオパギティス『第 9 書簡』2。Ed. by A. M. Ritter, *Corpus Dionysiacum*, vol. 2, Berlin-New York, 1991, p. 199.

(30) 同『神名論』¹⁹より。

私たちは同じ道筋を辿ってきた。同様に、聖書や父祖の伝統という神のヴェールによって、[神の]人間への愛は感覚により知覚されうるもので知性的なものを、実在するもので実在を越えたものを覆い、姿形なきものに姿形をもたらし。そして多様な形にして、本性を越えたものに形を、様々な象徴に姿を与えるのである。〔＝ 2.26〕

(31) 註——私たちの類似に一致して、姿形なきものや単純で形状のないものに姿形をもたらしすることが[神の]人間への愛に属するとしよう。ならば、姿形を通して見られたものの像を私たちのために作ってはならないことがあろうか。私たちはそれらを記憶に留め、[像が]表すものに倣うよう促されるのだ。〔＝ 2.27〕

(32) 同『教会位階論』²⁰より。

恭しくも既に言及したが、天上の存在と秩序には形がない。そして、その位階も知性的なものであり、世界を超越している。我々の位階は知覚しうるものの多くの象徴によって形成され、これらは我々の尺度と一致する。象徴は自ずと我々を知性的なものとして理解されるもの、すなわち神とその神的属性へと上昇させる。霊的な精神は自身の霊的な概念を形づくることができる。しかるに、我々は像によって神への観想へと上昇させられる。〔＝ 2.28, 3.44〕

(33) 註——私たちが知覚されうる像によって神の非物質的な観想へと導かれ、人間への愛ゆえに、神の摂理が私たちを手ずからお導きになるために姿形なきものに姿形をもたらししたならば、私たちの能力に準じて、姿形を纏われ、人間への愛から人として見られた方の像を作ることには何の不都合があろうか。

伝統により伝わる話がある。エデッサの王アブガルは神への愛ゆえに主の名声に恋い焦がれ、訪問を請うために使節を派遣した。もし主が訪問を拒まれたら、画家に主の似姿を描かせるようにと命じた。全知全能の主はこれを知り、一枚の端布を取って顔に押し当て、ご自身の姿を写された。件の端布は今日まで伝わっている²¹。〔＝ 2.29, 3.45〕

¹⁹ 同『神名論』1.4。Suchla, p. 114.

²⁰ 同『教会位階論』1.2。Heil, p. 65.

²¹ いわゆるマンディリオン伝承。マンディリオンは聖顔布、あるいは自印聖像とも訳される。この伝承の初出は4世紀のエウセビオス『教会史』1.13であり、ダマスコスのヨアンニスが本書のみならず『正統信仰について』89でも言及している。944年、エデッサを攻囲したヨアンニス・クルクアスが包囲を解く代償としてマンディリオンを入手し、コンスタンティノポリスに凱旋した。マンディリオンは大宮殿内のファロス聖堂に安置された。1247年、フランス王ルイ9世がマンディリオンを購入し、パリのサント・シャベルに収めた。フランス革命により消失。Louth, p. 40, n. 40 and ODB, vol. 2, pp. 1282-1283.

(34) 聖バシリオス『殉教者バルラウムについての講話』²²より、「はじめに、聖人の死」と始まっている。

蘇れ、燦然たる勲功の画家よ。そなたの技量で將軍の損なわれし像を讃えよ。彼が〔殉教の〕冠を授かった事情を、私は臆気にしか表しえぬが、そなたは知恵の絵の具で輝かしく描けよう。そなたに圧倒され、かの殉教者の武勲を讃えるのを控えよう。そなたの力に打ちのめされ、この日かような勝利を喜ぼう。私は見る。そなたによって、まさにその通りに描かれた苦闘を、手を火に炙られる〔姿を〕。私は見る。そなたの像に喜びで煌めく戦士〔の姿を〕。悪魔は吠えさせておけ。この輩はそなたに示された殉教者の数多の事績に倒されたのだから。焼かれた手を悪魔に対する勝利として再び掲げよう。我らが主キリスト、かの闘争の審判者が像に現れますよう。神が代々永久に讃えられますように。アーメン。〔= 2.30, 3.46〕

(35) 同『アンフィロキオス宛の聖霊論』全30章の第17章²³。

皇帝像が皇帝と呼ばれるにも拘わらず、皇帝は二人いないのだから、その力が分かたれることも、その栄光を共有することもない。我々を統べる権威は一つなのだから、我々の捧げる讃美も一つであり、多数はない。像への敬意は原型にもたらされるからだ。像が示すものは模倣により、御子は本性による。美術と似姿が形に一致するように、神の混合しえない本性とその結合は神と一致するのである。〔= 2.31, 3.48〕

(36) 註——皇帝像は皇帝、キリスト像はキリスト、聖人像は聖人ならば、その力が分かたれることも、その栄光を共有することもない。しかし、像の栄光は像に描かれた者の栄光になる。悪魔は聖人を恐れ、その影から逃げる。像は影であり、私は悪魔を退散させるためにこれを作る。あなたが神は霊によってのみ捉えられねばならないと言うなら、身体的なものは全て取り払うがよい。光、芳香、声の祈り、物質とともに祝われる神の秘蹟そのものを、パンも、ワインも、聖油も、十字架の形も。これらも全て物質である。十字架、海綿、葦、生命を授ける脇腹を貫いた槍。これら全てに捧げられた敬意を不可能なものとして捨て去るか、像への敬意を受け入れるかしたまえ。

神の恩寵は描かれたものの名を通して物質的なものに与えられる。紫、絹、双方で織られた外套は単純にして栄光はない。しかし、皇帝がこれを纏えば、服は着る者の栄光ゆえに栄光を分かちもつ。ゆえに、物質的なものはそれ自体が敬意に値するわけではない。しかし、描かれた者が恩寵に満ちていれば、観者はその信仰に応じて彼の恩寵に与ようになる。

使徒は肉体的な目で主を見た。使徒を見た者もあれば、殉教者を見た者もいる。私は切に望む。心でも体でも彼らを見て、悪魔を追い払う薬を持たんことを。私は二つの本性から成り、目で見

²² バシリオス『殉教者バルラウムについての講話』。PG 31, col. 489A-B.

²³ バシリオス『聖霊論』18.45. Pruche, p. 406.

て、私が見るものを神ではなく榮譽に相応しい人々の誉れある像として敬う。恐らく、あなたは私たちよりも優れ、肉体的なものよりも高次に、謂わば体なき存在に挙げられたのだろう。だから、あなたは目に見えるもの全てに侮って唾するのだ。しかし、私は人間であり、肉を纏っている。聖なるものと肉体的に交わり、それを見たいと切に願っている。私の慎ましき願いを見下すがよい、卓越したる者よ、あなたの優越が保てるように。キリストは私のこの方とこの方に属する方々〔聖人〕への憧憬を受け容れてくださる。というのも、大バシリオスが〔セバステの〕四十人殉教者〔を讃える講話で〕述べるように、忠実な僕によって讃えられれば、主人は喜ぶからである。歌に讃えられるゴルディオスを祝福して彼が述べたことをとくと考えてみたまえ。〔＝ 2.32〕

(37) 同『殉教者ゴルディオスについての講話』²⁴より。

義人による事績の記憶は世界中で霊の喜びの源である。人々は聞き知った聖なる事績に倣うよう促される。正しく生きた人々の話は救われようとする人々のために灯火のように道を照らしている。

少し後にもこうある。

我々が敬虔な人生で知られる人々について語る時、我々は第一にこれら僕〔聖人〕の主を讃美し、我々の知る証聖〔殉教〕ゆえにこれらの僕を称讃する。そしてよき知らせをもって人々を喜ばせる。〔＝ 2.33〕

(38) 註——聖人の記憶は神の栄光、聖人の称讃、世界の歓喜と救済であることがお分かりだろう。では、何ゆえあなたはそれを取り去ろうというのか。この神々しきバシリオスが言うように、記憶は言葉と像によりもたらされる。〔＝ 2.34〕

(39) 同講話より²⁵。

灯火は火により、芳香は没薬に由来する。同様に、有益なことはよき行いに続く。過去に起こった出来事の真実を捉えるのは容易なことではない。我々に伝わるその人の苦闘の美德は臆気だからだ。では、画家によって作られたこれらの肖像はどうだろうか。画家は像から像を写すので、像はしばしば原型から逸脱する。我々が見るもの自体から目を背ければ、真実を損なう危険は極めて少ない。〔＝ 2.35〕

(40) 同講話末尾²⁶。

²⁴ バシリオス『殉教者ゴルディオスについての講話』。PG 31, col. 492A-B.

²⁵ *Ibid.*, col. 493A.

²⁶ *Ibid.*, col. 508A

太陽はいつも我々を照らすにもかかわらず、我々を常に感心させる。同様に、この人の記憶も常に新しい。〔＝ 2.36〕

(41) 註——私たちが言葉と像を通して絶えず〔この聖人を〕見ているのは明らかである。〔＝ 2.37〕

(42) そして『至聖なる四十人殉教者についての講話』²⁷において、バシリオスは次のように述べる。

殉教者たちを愛する者はどうすれば彼らの思い出を十分に持ちえよう。輩よ、神の僕に捧げられた栄誉は我々に共通の主が善なることへの証言なのだ。

そして、また〔こう続ける〕。

幸いなるかな、〔四十人殉教者について〕心から証しする者は。その意志により殉教者になれる。迫害する者もなく、火〔に焼かれること〕も、殴打〔されること〕もなく、彼らと同じ報いを受けるに相応しい者とされる。〔＝ 2.38〕

(43) 註——何ゆえあなたは聖人の栄誉から私を閉め出し、私が救われていることを妬むのか。形が色で表されることを知る者は、彼がその後で述べることも聞け。〔＝ 2.39〕

(44) バシリオス²⁸。

揃って我らの真中に来なさい。講話では、これらの人々の素晴らしい事績を掲げよう。そして、参列者に共通の助けとなるよう、彼らから教訓を得て、絵におけるように、皆に彼らを示そう。〔＝ 2.40〕

(45) 註——像と言葉の働きが一つであることがお分かりだろうか。彼は言う。「我々は絵におけるのと同様に言葉によって示そう」。〔＝ 2.41〕

(46) そして、こうした言葉もある²⁹。

さらに、著作家と画家は双方とも疑いなく戦の勲を描いてきた。前者は修辞によりそれらを礼讃し、後者は画板に描いた。双方とも多くの人々に優れた行為を喚起させる。言葉が聴覚にもたらすものとまさに同じものを、言葉なき図像は模倣によって描き出すのである。〔＝ 2.42, 3.47〕

²⁷ バシリオス『セバステの四十人殉教者についての講話』。Ibid., col. 508B.

²⁸ Ibid., col. 508C-D.

²⁹ Ibid., cols. 508D-509A.

(47) 註——像が文盲の書物、聖人の栄光を伝える言葉なき先触れであり、音なき声で見る人々を教え、視覚を聖別することを、この行以上に明示するものがあるだろうか。私はさして多くの本を持たず、それを読む時間もさほどない。しかし、考えに押し潰されそうになると、聖堂——私たち皆の魂の避難所——に入る。絵画の艶は私を観想へと誘い、牧場のように私の目を楽ませる。そして、いつの間にか私の魂を神の栄光へと案内するのである。私は殉教者の堅忍と冠の報いを見た。あたかも火によるかのように私は情熱を燃え立たせて跪き、殉教者を通して神を崇拝し、救いを受ける。同じ神々しき教父〔バシリオス〕が詩篇冒頭に関する講話でこう言っているのを私は聞かなかっただろうか。「聖霊は人間が怠惰で美德に向かって動かしがたいとご存じだったので、詩篇の歌声と旋律を調和させたのである」³⁰。これをあなたは思うか。この殉教者たちの殉教を言葉と絵の具で描いてはならないのだろうか。そしてかの教会の導き手が言うように、「天使や全ての被造物には素晴らしく、悪魔には苦痛に満ち、悪霊には恐れ多いもの」³¹を目と口で抱いてはならないのだろうか。そして、四十人殉教者に関する講話の末尾で彼は次のように述べる³²。

「おお、聖なる聖歌隊よ。おお、聖別された兄弟よ。おお、打ち破りがたき軍勢よ。人類の守護者よ、悩める者の慰め、嘆願者の望み、いとも力強き執り成し手、世の光、教会の花——霊的にも物質的にも——。地はあなたを隠さず、天はあなたを受け容れる。御国の門があなたに開かれますように。〔その眺めは〕天使の軍勢に相応しく、総主教に相応しく、預言者や義人にも相応しい」。〔＝2.43〕

(48) 註——天使ですら見たいと切に願っているものをどうして私が切望してはならないのだ。これと一致して、彼の弟、同意見のニッサ主教グリゴリオス³³の述べるところを見てみよう。〔＝2.44〕

(49) ニッサ主教、聖グリゴリオスの補遺、すなわち『人間創造論』第4章³⁴より。

為政者の像を作る者は特徴だけでなく紫衣により王の威厳も表そうとする。よって、その像も習慣的に王と呼ばれる。人間の本性も同様である。人は万物を統べるべくして創られた際に、生ける像として建てられ、王としての尊厳も名も原型たる方に与った。〔＝2.45〕

³⁰ バシリオス『詩篇に関する第1講話』。PG 29, col. 212B.

³¹ 同『殉教者ゴルディオスについての講話』。PG 31, col. 501B.

³² 同『セバステの四十人殉教者についての講話』。Ibid., col. 524C.

³³ ニッサ主教（在位372～394年）。兄のバシリオスとナツィアンゾスのグリゴリオスとともに、第1コンスタンティノポリス公会議（381年）において三位一体論の確立に尽くした。ここで引用される『人間創造論』の他、『雅歌註解』等、多数の著作がある。第2ニケア公会議（878年）で「神父の中の神父」と讃えられ、現在の正教会において最も尊崇される教父の一人である。ODB, vol 2, p. 882.

³⁴ ニッサのグリゴリオス『人間創造論』4。PG 44, col. 136C.

(50) 同書第5章³⁵より。

神的な美は外形や見事な姿や美しい色調を通して輝くものではない。むしろ、徳によるえも言われぬ至福において観想されるものである。画家は人の形を様々な絵の具を使って画板に移し、それぞれの部分に適した色彩を施し、原型の美しさを正確に似姿に移し換える……。〔＝ 2.46〕

(51) 註——「神的な美は外形や見事な姿や美しい色調を通して輝くものではない」のだから、それは描くことはできない。絵の具によって画板に移しえるのは人間の形なのである。神の御子が人となり、僕の姿をとり、完全な人として人間の本性において見られたならば、何ゆえこの方の像を描いてはならないのだろうか。俗な言い回しをすれば、王の像は王と呼ばれ、聖なるバシリオスが述べるように、像への敬意は原型にもたらされる。それならば、像は神としてではなく受肉した神の像として讃え、敬われてはならないのだろうか。〔＝ 2.47〕

(52) ニッサのグリゴリオスが、コンスタンティノポリスにおいて御子と聖霊の神性、およびアブラハムについて説いた『講話 44 番』³⁶より。「そうしたものを好んで見る人々が花で飾られた草原により心動かされるように」との書き出しで始まる。

父は子を縛るために進む。私はこの痛ましい場面を描いた絵をしばしば見てきたが、涙なしには見られなかった。その絵はそれほど鮮明にこの場面を表している。イサクは祭壇の前に横たわり、足は縛り付けられ、手は後ろ手に縛られている。父は犠牲に近づき、左手でその神を掴んでいる。父は顔の上にひどく悲しげに屈み、息子の方を見る。右手に剣を持ち、まさに打たんとしている。切っ先が体に触れるまさにその時、神の声が聞こえ、手を下すことを禁じた。〔＝ 2.48, 3.50〕

(53) ヨアンニス・クリソストモス³⁷『ヘブライ人への手紙註解』³⁸より。

³⁵ 同書5. *Ibid.*, col. 137A.

³⁶ ニッサのグリゴリオス『御子と聖霊の神性について』。Ed. by E. Rhein et al., *Gregorii Nisseni, De deitate filii et spiritus sancti et in Abraham*, in ed. by W. Jaeger, *Gregorii Nisseni Opera*, vol. 10-2, Leiden-New York-Cologne, 1996, pp. 138-139.

³⁷ コンスタンティノポリス大主教（在位 398～404 年）。340 年代にアンティオキアに生まれた。名説教で知られ、そのために「クリュソストモス＝黄金の口」と呼ばれた。現在の正教会で行われる聖体礼儀はヨアンネス・クリソストモスに帰せられている。讒言により皇后エウドキアの勘気をこうむり、はじめニケアに、次いでアルメニアのククスに流された。『聖像擁護論』でも多数の著作が引用されている。ODB, vol. 2, pp. 1057-1058.

³⁸ 典拠不明。ヘブライ人への手紙についての『第 12 講話』は、ed. by F. Field, *Sancti Patris Nostri Joannis Chrysostomi, Interpretatio omnium epistolarum Paulinarum*, vol. 7, Oxford, 1862, p. 150.

ある決まった方法で、第一のものは第二のものの像である。メルキゼデクはキリストの〔像である〕。このように言う者もあろう。絵の模写は色において絵の影である。したがって、律法はやがて来るものの影、恩寵、真実、実在性と呼ばれる。それゆえ、律法とメルキゼデクは色における絵の先備的な模写であり、恩寵と真実は色におけるその絵である。これに対して、実在性はやがて来るものに属する。ちょうど旧約が摸像の摸像であり、新約が実在性の像であるように。〔＝ 2.49, 3.51〕

(54) キプロス、ネアポリス主教レオンティオス³⁹『十字架と聖人像と聖遺物への崇敬に関するユダヤ人駁論』⁴⁰より。

ユダヤ人よ、木の十字架を敬っていると言って私を非難するならば、なぜヤコブを非難しないのか。彼も杖の先を敬ったのではないか。ならば、彼が杖を崇拝したのではないのは明らかだ。それは我々と同様である。我々は十字架を通してキリストを崇拝しているのであり、十字架の木を崇拝しているわけではない。〔＝ 2.50〕

(55) 註——いかなる木材にせよ、私たちが十字架を敬うならば、どうして礎にされた方の像を敬ってはならないのだろうか。〔＝ 2.51〕

(56) また同じレオンティオスより。

アブラハムは彼に洞窟を売った不敬虔な人々に挨拶し、地に跪いたが、それでも彼は彼らを神として崇めたわけではない。ヤコブは不敬虔な偶像崇拜者ファラオを讃えたが、それでも神としてではない。さらに兄エサウにも跪いたが、彼を神として崇めてはいない。そして、また何ゆえ神は大地や山々を敬うよう我々に命じたのだろうか。「主、あなたの神を讃えよ。神の聖なる山の上で神を崇め、神の足台を拝め」(詩 99.9)。これはすなわち大地である。神は仰せになる。「天は我が玉座、地は我が足台」(イザ 66.1)。

モーセはエトロに挨拶し(出 18.7)、ダニエルはネブカドネツアルに挨拶したのはどうだろうか。どのように私を非難できようか。私は神を讃える人々を讃え、神に勤めを示しているのだから。教えてほしい。あなたがするように、聖人の像に石を投げるよりはむしろ、聖人を敬うことは相応しくないのか。聖人を攻撃し、あなたの恩人を泥濘に投げ込むよりはむしろ、聖人を敬うことが正しくないのか。あなたが神を愛していたならば、聖人を敬うことも吝かではないだろう。義人の骨が不浄ならば、何ゆえヤコブとヨセフの骨は讃美されながらエジプトから持ち出されたのだろうか(創 50.5、出 13.19)。死者がエリシャの骨に触れたとたんに蘇ったのはどうだろうか

³⁹ 7世紀のネアポリス主教(在位不明)。『ヨアンニス・エレイモン伝』や『エメサのシメオン伝』等の聖人伝を残した。 ODB, vol. 2, pp. 1213-1214.

⁴⁰ 現在は散逸。『第三の論駁』と第2 ニケア公会議で引用されている。

(王下 13.21)。神が骨を通して奇跡をなされるのならば、像や石、その他多くのものを通して奇跡をなされるのも明らかである。エリシャは僕に杖を渡して言った。「これをもって行きなさい。そしてシュネムの婦人の息子を死の淵から蘇らせなさい」(王下 4.29)。モーセは杖をもってファラオを罰し、水を割り、岩を打って泉を湧き出させた。ソロモンは言う。「義をもたらした木は祝福される」(知 14.7)。エリシャは木の枝を投げてヨルダン川から斧を拾い上げた(王下 6.4-7)。その木は生命の木、藪の木、すなわち赦しの木である。モーセは木に〔青銅の〕蛇を掲げ、民を救った(民 21.9)。幕屋において芽吹いた杖はアロンが祭司であることを確かなものとした(民 17.8)。

ユダヤ人よ、神は幕屋において聖櫃の全てのものに関してモーセに予め指示を与えていたのだと、あなたは言うだろう。しかし、私はこう答えよう。ソロモンは神殿内に彫刻や浮彫で様々なものを作った。それらは神も命じられてはいない(歴下 3.1)。幕屋の聖櫃も、神がエゼキエルに示された神殿も(エゼ 40.47)、それらを含んでおらず、ソロモンも個連ついて咎められなかった。我々と同様、彼も神の栄光のために彫像を作ったのだ。恩を忘れて失わなければ、あなたも神を思い出すのに役立つ様々な旧約の像や象徴を持っていただろう。例えば、モーセの杖、律法の石板、燃える柴、水を湧き出した岩、マナを納めた聖櫃、天からの火が燃える祭壇、神の名を湛える葉、エフォダ、神に覆われた幕屋。あなたが昼夜を分かたずにこれらを備えていたならば、「あなたに栄光のあらんことを、全能の神よ。あなたはこれらを通じてイスラエルに奇跡を起こされた」と言うだろう。これら全て律法が命じたことを通して跪いて神を崇拝していたならば、像を通じて神に崇拝が捧げられると言うことがお分かりだろう。

そしてさらに続く。

友人や王、とりわけ恩人を心から愛する者がいたとしよう。その彼が恩人の息子や職杖、椅子や冠、家や僕を見たならば、それらを強く抱きしめるだろう。その彼が恩人や王を湛えるならば、神はいかばかりだろうか。繰り返しになるが、あなたがモーセや預言者の律法によって像を作っていたならば、日々神の像を敬っていただろう。それゆえ、あなたが十字架に祈るキリスト教徒を見るときはいつでも、ただの木ではなく、磔にされたキリストを崇めていることを知るべきだ。彼らが木を木として讃えるならば、イスラエルよ、かつてあなたが木や石に「あなたは我が神、私を生まれた方」(エレ 2.27) といって崇めていたように、彼らも種類が何であれ木を崇拝しなければならないだろう。我々は十字架にも聖人像にもこのように話しかけたりしない。それらは私たちの神ではない。しかし、祭壇に開いておかれた聖書は私たちに神を想起させ、神を崇めるよう導くために崇敬されている。殉教者を讃える者は神も讃える。というのも、殉教者はこの方のために証聖したのだから。使徒を敬う者は使徒を使わしたキリストを敬う。キリストの母に跪く者は間違いなくその息子を讃えている。唯一の神の他に神はなし。この方は三位一体において知られ、崇められる。〔= 2.52〕

(57) 註——これが幸いなるエピファニオスの言葉の忠実な解釈である。エピファニオスは自

らの言葉でキプロスの島や心から語る人々を飾る。ガバラ主教セヴェリアノス⁴¹の証言にも耳を傾けよう。〔＝ 2.53〕

(58) ガバラ主教セヴェリアノス『十字架の奉献について』⁴²より。

非難された者〔蛇〕の像が我々の父祖に命を与えたことはどうだろうか。

非難された者の像が苦難に喘ぐ民を救ったことはどうだろうか。こういった方がより理に適っているのではないか。「あなた方のうち咬まれた者があれば、天を、神を見上げさせよ。さすれば、神が救ってくださる。あるいは神の幕屋を見やるようにせよ」と。これを無視して、彼は十字架の像のみを掲げたのだ。なぜモーセはこうしたのだろうか。モーセは言った。「上は天にあり、下は地にあるものの、そして地の下の水にあるものの、いかなる像も作ってはならない」(出 20.4)。しかしながら、私は何ゆえつまらぬ人々に語るのだろうか。敬虔な神の僕よ、教えてほしい。あなたは禁じられていることをし、するように命じられたことを疎かにするだろうか。「いかなる像も作ってはならない」と言われた方は黄金の子牛を咎められたが、あなたは秘密裏にではなく公然と青銅の蛇を作った。ゆえに、このことは皆が知っている。

モーセは答える。「私があのように命じたのは不信心な振る舞いを根絶やしにし、民を背教や偶像崇拜から遠ざけるためであった。私は蛇をよき目的のため真実の形として掲げさせた。私は幕屋を建て、あらゆるものを中に納めさせ、不可視の力の似姿であるケルビムを至聖所一面に施したが、それは未来の徴や形としてであった。よって、私は十字架の像と贖罪の先取りとして民の救いのために蛇の像を掲げたのである」。その証左として主の言葉を聞け。「モーセが砂漠で蛇を讃えたように、人の子を讃えよ。神を信ずる者は失われず、永遠の命を得る」(ヨハ 3.14)。〔＝ 2.54, 3.52〕

(59) 註——次のことを理解なさい。像を使ってはならないという命令は、民が偶像崇拜に堕しがちであったがゆえに、偶像崇拜から民を引き離すために与えられた。そして、青銅の蛇は主の苦しみの像である。〔＝ 2.55〕

(60) 像の発明は新しいものでなく古来の慣習である。聖にして選ばれたる教父もこれに精通している。聞きたまえ。このことは〔大バシリオスの〕弟子にして後任の主教エラディオスによる『聖バシリオス伝』⁴³に書かれている。この聖者は我々が女王〔マリア〕のイコンの前に立つ

⁴¹ 5世紀のガバラ主教(在位不明、430年以前に死去)。皇室に大きな影響力を持ち、論敵ヨアンニス・クリソストモスの追放劇で重要な役割を演じた。ODB, vol. 3, pp. 1883-1884.

⁴² セヴェリアノス『蛇についての講話』。PG 56, cols. 499-516.

⁴³ エラディオスが『バシリオス伝』を書いたという記録は他では見いだせない。

ていた。それには永久に讃えられる殉教者メルクリオス⁴⁴の像が描かれていた。この方は立って、神も恐れず教えに背いた僭主ユリアノスを覆さんと祈っていた。この像から彼は啓示を知った。彼がしばらくそれを眺めていると、殉教者が消え、その後まもなく血糊のついた槍を手にして「殉教者が現れたのである」。^{〔= 2.56, 3.53〕}

(61)『ヨアンニス・クリソストモス伝』⁴⁵には、まさにこのように書かれている。

幸いなるヨアンニスはいとも聡きパウロの書簡をこよなく愛読していた。

そしてさらに続く。

ヨアンニスはこの使徒パウロのアイコンを持っており、それを体の弱さゆえに小休止を取っていた場所に置いていた。体力の限界を超えてまで晩禱を捧げるのが常だったのだ。ヨアンニスは使徒の手紙を読み終えると、使徒の像を前に置き、あたかも使徒がそこにいるかのように話しかけたものだった。そして、彼は使徒を讃え、全思考を彼に傾けた。

他の話の後に。

プロコロスは話し終えると、使徒のアイコンを見つめた。そしてその姿が彼に現れた人物の似姿であることに気がついた。プロコロスはヨアンニスに敬礼しながら、アイコンを指さして言った。「お許してください、父よ。私があなたに話しかけているのを見た人物はこの方です。まさしく同じ人です」。^{〔= 2.57, 3.54〕}

(62)『聖エウプラクシア伝』によれば、主の護る群れの中に主の似姿が彼女に現れたという⁴⁶。^{〔= 2.58〕}

(63)『エジプトのマリア伝』によれば、彼女は我らが女王の像に祈り、執り成し手になってくださるよう祈った。こうして、彼女は聖堂に入ることができた⁴⁷。^{〔= 2.59〕}

(64) 私たちの聖なる教父、エルサレム総主教ソフロニオス⁴⁸『霊の園』⁴⁹より。

⁴⁴ カップパドキア出身の戦士聖人。祝日は11月25～26日。キリスト教を迫害した皇帝デキウス（在位249～251年）治下で殉教したとされる。背教者ユリアノスを暗殺したという伝承も伝わる。ODB, vol. 2, p. 1345.

⁴⁵ Louth, p. 54, n. 153によれば、引用はクリソストモスの弟子パラディオスが彼の死の直後に著した伝記ではなく、7世紀のアレクサンドリア主教ゲオルギオスによる版である。

⁴⁶ 詳細は『第三の論駁』136章参照。

⁴⁷ 詳細は『第三の論駁』135章参照。

⁴⁸ エルサレム総主教（在位634～638年）。単性論や単意論との論争で知られる。エルサレムがイスラーム支配に入ったのは彼の在位中のことである。引用された『霊の園』はヨアンニス・モスコスの著作であるが、ソフロニオスに献呈されているため、ビザンティン時代にはソフロニオスの著作として引用される。ODB, vol. 3, pp. 1928-1929.

⁴⁹ ヨアンニス・モスコス『霊の園』45. PG 87, col. 2900B-D.

修道院長テオドロス・アイリオティスはオリブ山の聖なる隠者について語った。かれは姦淫の悪魔に大層脅かされていた。ひどく誘惑されたある日、彼は苦々しげに不平を漏らした。彼は悪魔に言った。「いつになったら独りにしてくれるのだ、儂から去ね」。すると、悪魔が現れて言った。「私がこれから言うことを守るように誓え。そうすればお前をこれ以上煩わせまい」。老人は誓った。すると悪魔が言った。「この像を敬うな。さすればお前を苦しめない」。件の像には我らが女王、生神女、聖なるマリア様が腕に我らが主イエス・キリストを抱く姿が描かれていた。隠者は悪魔に言った。「去ね。考えておこう」。

明るる日、このことはファランのラヴラに住まう修道院長テオドロス・アイリオティスの知るところとなった。彼〔テオドロス〕は彼〔隠者〕のところに行き、全てを聞いた。老人は隠者に言った。「そなたが誓った時、そなたは馬鹿にされたのだよ。しかし、よくぞ真実を明かしてくれた。そなたには我らが主、神イエス・キリストとその母君を敬うことを拒むよりも、この町の人の入らぬ遊郭など残さぬようにするがよい」。彼〔テオドロス〕は多くの言葉で〔隠者を〕力づけ、決意を固めさせて、在所に帰るため去っていった。

すると、再び隠者に悪魔が現れて言った。「これは一体どうしたことだ、^{カロギロス} 邪な尊者⁵⁰ よ。お前は誰にも言わぬと誓わなかったか。それなのに、どうしてお前のところに來た者へ全てを話したのだ。言っただろう、邪な老人よ。お前は裁きの時に偽証者として裁かれるだろうよ」。隠者は答えていった。「儂が誓ったことは儂が誓ったのだ。私が自分を欺いたことぐらい、知っておるわ。じゃが、儂は間違っただけで主、造り主に誓ったのだ。お前の言うことなぞ聞かん」。〔＝ 2.67〕

(65) 註——これでお分かりだろう。彼は描かれた方の像を敬うことについて語っている。これを敬わぬことがいかに邪惡であり、どうして悪魔が姦淫よりも〔こうした崇敬を〕選んだかもご覧になっただろう。〔＝ 2.68〕

(66) これまで聖職者や皇帝の多くが天、神に由来する知恵を授かり、信仰、教義、生涯によって見極められてきた。そして、聖にして天啓を受けた教父の教会会議が幾度となく開催されてきた。それにもかかわらず、何ゆえ誰もこれらのことを説明しようとしなかったのだろうか。新たに説かれた信仰を許してはならない。聖霊は仰せになった。「律法はシオンから、主の言葉はエルサレムよりいずる」(イザ 2.3)。様々な時代に案出された多様な教え——時代とともに移り変わる——を許してはならない。信仰が部外者の物笑いの種とならぬよう。教父伝来の慣習がそれを覆さんとする勅令に服することを許してはならない。教会の法を覆すのは敬虔な皇帝の所行にあらず、教父の道でもない。力によってこれらを強いるのは海賊に等しく、広がりはずまい。その証拠が

⁵⁰ 本来「尊者」が修道士の尊称となる。ここでは誓言を反故にされた悪魔がこの尊称をもじって隠者を罵っている。

エフェソスで催された2度目の教会会議であり、これは「盗賊会議」と呼ばれている。皇帝⁵¹の手により強要され、幸いなるフラヴィアノス⁵²は死に追いやられた。これらはあくまで教会会議の事柄であり、皇帝ではない。主はこう仰せである。「私の名の下に二人三人と集まれば、彼らの中に私はいる」。キリストが緩急の権能を授けたのは皇帝ではなく、使徒、そして牧者や教師として彼らの後を継いだ人々である。「もし受け容れたものに反する福音を説く者がいれば」と使徒パウロは言われたが、彼らを見逃し、改心を願って続きは言うまい。しかし、対話もなく彼らの狂気が続くようなら、残りの言葉を採り入れるとしよう。願わくば、その必要がなからんように。〔＝2.69〕

(67) 誰かがある家に入ってきて、画家が色でモーセとアロンの物語を描いた壁があったとしよう。その人は恐らく海を抜けて乾いた土地に民を導いた方々について訪ねるだろう。「彼らは誰ですか」。こう尋ねられたら、あなたはどうか答えるだろうか。「イスラエルの子らですか」。「杖で海を打っているのは誰ですか」。「モーセですか」。誰かが礫にされたキリストを描き、「これは誰ですか」と尋ねたら、彼はこう答えるだろう。「キリスト、神、私たちのために肉となられた方です」。

主よ、私は強い憧れとともにあなたのもの全てを敬い、奉じる。あなたの神性、あなたの力、あなたの善意、あなたの憐れみ、私たちの境遇への遜り、あなたの受肉、あなたの肉体の全てを。私が赤熱した鉄に触れるのを恐れるのは、鉄の本性ではなく、鉄と一つになった火ゆえである。同様に、私があなたの肉を敬うのは、肉の本性ではなく、位格において一致した神性ゆえである。私はあなたの苦しみを敬う。死が敬われ、苦しみが敬意をもって扱われるのを見るものがあろうか。しかし、私たちは真実に私たちの神の肉体的な死と救いの苦しみを敬う。私たちはあなたの像を敬う。あなたのもの全てを敬う。あなたの僕、あなたの友、何にもましてあなたを生まれた母君を。〔＝2.70〕

(68) ゆえに、神の民、聖なる御国に教会の伝統を保持するよう懇願する。建物から小さな石を一つ取っただけで建物はすぐに倒壊してしまう。例え些細なことでも、伝えられてきたものも取り除いてしまえば同じ憂き目に遭うだろう。私たちは断固として怯まず、冷静でいよう。堅固な岩の上に身を立てよう。その岩とはキリストである。栄光、栄誉、崇敬が代々永久に御父と聖霊とともにこの方に帰せられますように。アーメン。〔＝2.71〕

⁵¹ テオドシオス2世（在位408～450年）。コンスタンティノポリスの大城壁を建設したことで知られる。エフェソス公会議（431年）でネストリウス派を排斥した一方で、単性説主導のエフェソス盗賊会議（449年）を支持した。

⁵² コンスタンティノポリス総主教（在位446～449年）。エフェソス盗賊会議でローマ教皇レオ1世とともに排斥された後、拷問の末に殉教した。

聖像破壊論者への第二の論駁

(1) 読者よ、ご寛恕を乞うとともに、私が神の教会のつまらぬ卑小な僕にすぎぬとは申せ、その確かな言葉を受け容れてくださるようお願い申し上げる。私が語るのは虚飾ではなく——神が証人となつてくださる——真実を熱望するがゆえである。真実にしか救いの希望はなく、真実とともに信じて祈り、罪の赦しを乞いつつ、私たちの主キリストに会いに行く。主人から五タラントを受け取った者はさらに5タラントを、2タラントの者はさらに2タラントをもたらし。主人から1タラントを受け取っておきながら、地に埋め、利子も付けずに返した者は悪い僕と宣告され、外の暗闇に追い出される（マタ 25.20-30）。同じ目に遭わぬよう、私は主の命に従い、神から授かった言葉の賜物をあなた方、賢き銀行家に委ねよう。さすれば、主がいらした時、私が魂において豊かで忠実な僕であることをご覧になり、この方のいとも甘美な喜び——私が切に望んでいた——へと連れて行つてくださるだろう。聞く耳を貸し、あなた方の心の祭壇を開けただきたい。私の論考を受け容れ、私が議論したことの力を誠実に判断されたい。本稿は像に関する私の著作の第二部である。第一の論考が全てを明らかにするには不十分だったので、幾人かの教会の子らが私にこれを書くよう強く勧めていたのである。こうした訳で、私の従順さに免じて大目に見ていただきたい。

(2) 古より邪な蛇——悪魔を指す——は様々な形で神の像に似せて造られた人間に戦いを挑み、敵対を通じて死をもたらすのを常とする。蛇は始めに人間に神になる希望と欲求を吹き込み、その欲望によって人間を引きずり下ろし、ともに獣の死を担わせた。のみならず、恥ずべき獣じみた快樂により人間を誘惑してきた。神化と獣欲には何たる違いがあることか。ある時は神の父祖ダヴィデが「愚者は心に言う、神などいない」（詩篇 14.1）と言うように、悪魔は人間を不信心に導いた。多神教に導く時もあれば、真の神さえ崇めさせぬ時もあり、時には悪魔に、はてまた天と地、太陽、月、星、他の被造物、獣や蜥蜴の類を崇めるよう導くこともある。然るべきものを讃えようとしなないことは、相応しくないものを讃えるのと同じ過ちである。また、彼はある人には造られぬ神を悪と呼ぶよう教え、またある人には本性的に善なる神を悪の張本人と欺いてきた。神の一つの本性と一つの位格という謬説で人を騙し、三つの位格と三つの本性を崇めるよう不道

徳にも唆してきた。あるいは、聖三位一体の一人、我らが主イエス・キリストの一つの位格と一つの本性⁵³とか、この方の二つの本性と二つの実体⁵⁴とかを讃えよと勧めてきたのである。〔= 3.1〕

(3) しかし、真実は中道を歩んで、これらの不条理を一掃し、唯一の神、父と子と聖霊、三つの位格における一つの本性を告白するように説く。悪とは存在ではなく偶然であり、神の法に反する何らかの思考、言葉、行為である。こうした思考、言葉、行為に起源を有し、それに帰結する。真実はまた聖三位一体の一者、キリストに二つの本性と一つの位格があると説く。

(4) 真実と人類の救済の敵である〔悪魔〕はしばしば不信心な者、鳥、獣、蜥蜴の類の像を造り（ロマ 1.23）、神として崇めるよう吹聴し、異邦人のみかイスラエルの子らも墮落させてきた。今日では、誤りと偽りの舌によってしきりにキリストの教会の平和を乱そうとしている。悪しきものをよしとして神の言葉を用い、邪な目的を隠し、心弱き者たちを真にして教父の伝統から引き離そうとしているのだ。こう言って立ち上がった者もある。キリストの救いの奇跡と苦しみ、そして悪魔に対する聖人の勇敢さを像に描き、奇跡や熱意を観想や讃美するために掲げてはならない、と。神聖なことを知り、霊的な感覚を持つ備えた人でこの中に悪魔のまやかしを見抜けぬ人がいようか。悪魔は己の恥が知られ、神と聖人の栄光が公にされたがらないのである。〔= 3.1〕

(5) もし私たちが目に見えぬ神の像を造るなら、罪を犯すことになる。体なく、目に見えず、輪郭なく、形なきものは描けないからだ。また、もし私たちが人間の像を造り、それを神となし、そのように崇めるならば、不敬の限りを尽くすことになる。しかし、私たちはそのいずれもしない。しかし、神は受肉して地上で見られ、語り尽くせぬ善意により人々の間に人となり、姿、形、肉を纏われた。よって、神の像を作っても、私たちは間違っていない。私たちはこの方の姿を見んと切に望む。神々しき使徒〔パウロ〕は言う。「私たちは今、鏡に映るものを臍気に見る」（一コロ 13.12）と。像も私たちの肉体の鈍さに準じた臍気な鏡なのである。精神はいかに苦勞しようとも身体的な本性から逃れられないと⁵⁵、聖なるグリゴリオス⁵⁶は言う。〔= 3.2〕

(6) 邪な悪魔よ、恥を知れ。私たちが主の似姿を見ることで聖別されることを恨みに思うとは。

⁵³ ラオディケア主教アポリナリス（310～390年）の説。アタナシオスとともに、反アリオスの論陣を張った。キリストは人間の体と魂を持つが、天の理性を有するという教説は教会に受け入れられたものの、第1コンスタンティノポリス公会議（381年）において異端と宣告された。ODB, vol. 1, p. 138.

⁵⁴ モプスエスティア主教テオドロス（350年頃～428年頃）の説。ヨアンニス・クリソストモスとともに、リバニオス、タルソスのディオドロスの下で学ぶ。第2コンスタンティノポリス公会議（553年）において、弟子のネストリオスに影響を与えたとして異端と宣告された。ODB, vol. 3, p. 2044.

⁵⁵ ナツィアンゾスのグリゴリオス『第28講話』13。Gallay, p. 128.

⁵⁶ ナツィアンゾスのグリゴリオス。

お前は私たちに救いをもたらす神の受難を見つめさせようとも、神の遜りを感嘆させようともしない。神の奇跡を観想させようとも、神の神聖なる力を讃えさせようともしないではないか。お前は神が与えた栄光ゆえに聖人を妬んでいる。お前は私たちが彼らの栄光が描かれたものを見ることも、彼らの勇気と信仰を熱心に倣うことも望んでいない。彼らへの信仰から我らの肉体と魂に救いが訪れることも望んでいない。

人に仇なす悪魔よ、私たちはお前の姦言には従うまい。諸々の民よ、諸々の部族よ、様々な言葉を使う民よ、老若男女よ、青年も嬰兒も、聖なるキリスト教徒よ、耳を傾けてほしい。もし何者かが正統なる教会が聖なる使徒や教父より受け、今日まで伝えられてきたものに反することを述べ伝えようとしても、その者に耳を貸してはならない。エヴァアがしたように、蛇の言葉を受け容れてはならない——彼女は死を刈り入れる羽目になった。天使や王があなたの受け継いだものと反することを述べ伝えるならば、耳を塞ぎなさい。私はこれまで口にするのは差し控えてきたが、聖なる使徒は「呪われよ」(ガラ 1.8)と言った。それは改心を願っていたからである。〔= 3.3〕

(7)しかし、聖書の真意を解さない者は言う。神は立法者モーセを通してこう仰せになった、と。「上は天にあり、下は地にある、いかなるものの形も造ってはならない」(創 20.4)。また、預言者ダヴィデを通してこう仰せになった、と。「彫像を崇める者、偶像を誇りとする者は全て辱められる」(詩篇 97.7)。他にも同様の記述は数多い。聖なる書物や聖なる教父から何を引用しようと、彼らの意図は同じである。

これには何と答えようか。主がユダヤ人に言ったことではないが、「聖書を精査せよ」(ヨハ 5.39)。聖書を研究するのはよいことだ。しかし、ここではよく弁えて注意しなくてはならない。親愛なる友よ、神が偽ることなどありえない(ヘブ 6.18)。「神はかつて預言者を通じて父祖に様々な仕方と様々な方法で語り、この終わりの時にはその独り子によって語った」(ヘブ 1.1) 唯一の神、新旧の契約における唯一の立法者がいる。さて、厳密に頭を使いたまえ。語るのは私ではない。聖霊が聖なる使徒パウロにより「神はかつて預言者を通じて父祖に様々な方法で語り、この終わりの時にはその独り子によって語った」と言明したのだ。神が様々な仕方と様々な方法で語ったことに留意しなさい。

優れた医者は皆同じようにはではなく、それぞれの必要に応じて処方する。病や気候、季節や年齢を考慮し、年齢によって子供にはこれ、成人にはあれと、あるいは弱った患者にはこれ、強い患者にはあれと別の薬を与え、患者それぞれの状態と病患に適切な処置を施す。また、夏にはこれ、冬にはあれ、春秋にはまた別ものと、それぞれの場によっても必要に応じる。同様に、善き魂の医師はいまだ子供で偶像崇拜に陥りやすい者に処方を与える。彼らが偶像を神々にしようとし、これをそのように崇拝し、神への礼拝を怠り、神の栄光よりも被造物を好むからだ。神はこれらをせぬよう命じるのだ。

神は体なく、目に見えず、物質でもなく、形も輪郭もないため、神の像を作ることはできない。どうして不可視のものの像が作れよう。「いまだかつて神を見た者はいない。父の懐にいる独り

子である神、この方が神を示された」(ヨハ 1.18)。また、「人は我が顔を見て生き長らえることはない」(出 33.20) と神は仰せである。〔＝ 3.4〕

(8) 彼らが偶像を崇めていたことは疑うべくもない。イスラエルの子らの脱出について聖書が述べることを聴きたまえ。その時、モーセはシナイ山に登り、しばし神に祈った。律法を授かっている間に、恩知らずの民は立ち上って神の祭司アロンにこう言った。「我々に先立って進む神々を作ってください。モーセに何が起こったのか分からないのだから」(出 32.1)。そして、彼らは妻達のアクセサリーを見て一カ所に集め、食べ、かつ飲んだ。彼らはワインと狂気に酔って浮かれはじめ、愚かにも言った。「イスラエルよ、これがあなたの神々だ」、と。あなたは彼らが悪魔である偶像の神々を作り、創造主の代わりに被造物を崇めたことを知らないのか。聖なる使徒が言うように、彼らは「滅ぶことなき神の栄光を、滅びゆく人間、鳥や四つ足の獣、這うものに似せた像に替え」(ロマ 1.23)、「創造主ではなく被造物に仕えた」(ロマ 1.25)。そのため、神は彼らにいかなる像をも刻むことを禁じたのである。モーセが申命記に曰く、「主は火の中からあなた方に語りかけた。あなた方は主の語りかける声を聞いたが、何の形も見なかった」(申命 4.12)。少し後に「気をつけてあなた方の魂を保ちなさい。主がホレブで火の中から語った日、あなた方は何の形も見なかった。騙されて自分のためにいかなる彫像も像も作らぬように。男や女の形も、地上にあるいかなる獣の形も、天の下に飛ぶいかなる鳥の形も」(申命 4.9, 15-17)。そして、「目を上げて天を仰ぎ、太陽や月、天空のあらゆる星を見て、誤りに惑わされ、崇め仕えぬように」(申命 4.19)。

創造主に代わって被造物が崇拜されてはならず、創造主以外の何者にも礼拝の敬意を捧げてはならないという主旨が見てとれる。いずれにせよ、神が崇拜について語る時は礼拝を意味する。また「あなたには私の他に神があつてはならず、自分のために彫像やいかなる像も作ってはならない」(申命 5.7-8)。また「自分のために鑄像の神々を作ってはならない」(出 34.17)。

神は偶像崇拜ゆえに像を作ることを禁じられたのであり、体なく、目に見えず、輪郭のない神の像は作れないことがお分かりだろう。「あなた方はこの方の姿を見なかった」(申命 4.15)。パウロはアレオパゴスの真中で言われた。「私たちは神の畜なれば、神を金、銀、石、彫刻、人の手になるものと同じものと思つてはならない」(使 17.29)。〔＝ 3.5〕

(9) こう言われていることを聞きたまえ。「自分のために彫像もいかなる像も作ってはならない」。こうともある。神の命により「幕屋の入口に葦、紫、緋色の毛糸、亜麻の縊り糸を使ってケルビム模様の垂れ幕を作れ」(出 26.31)。また「贖いの座、すなわち純金の至聖所を作り、ケルビムを二体作れ」(出 37.6-7)。モーセよ、あなたはこれをどのように説明するのでしょうか。「自分のために彫像もいかなる像も作ってはならない」と仰る一方で、ケルビムの織物や純金製のケルビムを作るようにお命じになる。

神の僕モーセの答えを聞きたまえ。「蒙く愚かな民よ、言われたことの力を心に留め、気をつ

けてあなた方の魂を保ちなさい。主がホレブ山で火の中から語られた日、あなた方は何の形も見なかった。律法に背いて罪を犯し、自分のために鑄像を作らぬように。鑄像の神々もいかなる像も作ってはならない。私は贖いの座に仕えるケルビムの像を作ってはならないとは決して言うてはいない。私が言ったのは、自分のために鑄像の神々を作ってはならないこと、神のものとしていかなる像も作ってはならないこと、創造主の代わりに被造物を崇拜してはならないこと、神をおいて他に神があってはならないこと、創造主として被造物を礼拝してはならないこと、すなわち被造物が創造主の代わりに、あるいは被造物が何であれ神として礼拝されてはならないこと、創造主ではなく被造物に仕えてはならないことである」。(≒ 3.9)

(10) その意図が聖書を精査する者にはいかに明白であるかをご覧ください。親愛なる友よ、真実と虚偽、なされたことの中身の善悪を峻別することを心得ておかねばならない。福音書には善きものも悪きものも全てが書かれている。神、天使、天、地、水と火と空気、太陽と月と星、光と闇、サタンと悪魔、蛇と蠍、死と地獄、美德と悪徳。これらについて語られたことは全て真実であり、その意図は神や神が輝きで満たした聖人、私たちの救い、悪魔の恥辱を讃えることにある。だからこそ、私たちはこれらの言葉を敬い、奉じ、愛する。そして、新旧の摂理全てを、聖なる教父が語られた証言全てを受け容れるように、これらの言葉を全身全霊で受け容れるのである。私たちはマニ教や異教徒、その他全ての異端の邪で粗末な著作を排斥する。例え神の名を湛えていようとも、それらは愚かしさと偽りに満ちており、サタンと悪魔を増長させ、彼らに喜びをもたらすからである。

それゆえ、私たちは像について真実を明示し、像を作る人々の真意を考慮せねばならない。それが神と聖人を讃え、善を進め、悪を避け、魂を救うためになされるのならば、私たちは像、模像、似姿、文盲の書物として受け容れ、讃え、敬うべきである。そして、それらを受肉した神、この方の母、聖人、キリストの苦難と栄光を分かち持つ人々、サタンと悪魔の偽りに勝利し、屈服させた人々を想起させるものとして目と手と心で敬い、愛すべきである。もし何者かが空々しくも限りなく、体なく、目に見えず、輪郭も色もない全能の神の像を作るなら、私たちはこれを欺瞞として拒む。もし何者かがサタンと悪魔を讃え、敬うために像を作るならば、私たちはこれを嫌悪し、火にくべる。もし何者かが人、鳥、蜥蜴、その他の被造物を神となすなら、私たちはその者を呪う。私たちの聖なる父祖は悪魔の神殿を引き倒し、同じ場所に私たちが讃える聖人の名において聖堂を建設した。そして、悪魔の像を覆し、それに代わってキリスト、生神女、聖人の像を掲げた。旧約の時代にあっても、イスラエルは人の名において神殿を建てず、人の記憶を聖別することはなかった。当時、アダムの子は呪われ、死は罰、ゆえに深い悲しみだった。亡骸は穢れと、それに触れた者も不浄と見なされた。しかし、神が私たちの本性を纏われた今、それは命を生み出す救いの薬として讃えられるようになり、不死へと一変させられた。それゆえ、聖人の死は喜びであり、聖堂は彼らのために建てられ、彼らの像が掲げられたのである。(≒ 3.9)

(11) 次のことを肝に銘じておきたまえ。キリスト、この方の母にして聖なる生神女、聖人を讃え、記念する像、すなわち悪魔とその手下を辱め、信心深き望みと熱心さをもって造られた像を打ち壊さんとして手を掛ける者や、栄光への純粋な熱意によりうち立てられた像に手をかけんとする者、この像を聖なるものとして讃え、奉ること——神のようにではなく——を拒む者、その者は、キリスト、聖なる生神女、聖人の敵、サタンと悪魔の擁護者である。その行いから神と聖人が栄光に帰せられ、悪魔が辱められることを嘆いているからである。像は闘って勝利した人々の、そして恐れをなして潰走した悪魔を記念する讃歌、現れ、凱歌なのである。〔≒ 3.10〕

(12) 王は教会において法を制定できない。聖なる使徒は何と言っているか。「実に、神は教会を訓育するために様々な人を立てた。第一に使徒、第二に預言者、第三に牧者と教師である」(一コリ 12.28)。神は王とは仰っていない。「聖職者に従い、服従しなさい。彼らはあなた方の魂の世話をし、祈明します」(ヘブ 13.17)。そしてまた「あなた方に神の言葉を語った聖職者のことを思い出しなさい。彼らの信仰に倣い、会話の終わりを考慮しなさい」(ヘブ 13.7)。私たちにその言葉を説いてきたのは王ではなく使徒、預言者、牧者と教師である。神が神の住まいを建てることについてダヴィデに語りかけた時、神はこう仰せになった。「あなたは血の人ゆえ、あなたにわたしの神殿は築かせない」(代上 28.3)。使徒パウロは声高にこう述べた。「敬うべきものを敬い、畏れるべきものを畏れ、貢ぎ物を贈るべき人に贈り、税を納めるべき人に納めなさい」(ロマ 13.7)。

政治的に成功することは王の本分であり、教会を組織することは牧者と教師に属する。兄弟よ、これを彼らの手から取り上げるのは強盗を犯すに等しい。サウルはサムエルの上着を裂いたが、結果はどうなっただろうか。神は王国を彼から取り上げ、従順なダヴィデに引き渡したではないか(サム上 15.27-28)。イゼベルはエリヤを追ったが、犬が彼女の血に浴したではないか(王上 19.2-3; 王下 9.33)。ヘロデはヨハネを殺したが、蛆がヘロデを喰らい尽くしたではないか(使 12.23)。最近では、言行により輝く祝福されたゲルマノス⁵⁷は罰せられて追放された。そして、その名を知るよしもないが、多くの主教と神父も「罰せられた」。これは迫害ではないのか。ファリサイ人と学者が主を囲み、その教えを聞くよう装って皇帝に税金を納めるのは律法に適うかと尋ねた。主は彼らに「税金に納めるお金を持ってきなさい」と答えた。彼らが銀貨をもってくると、主は「これは誰の像と銘か」と尋ねた。彼らが「カエサルのもので」と答えるとすぐに、主はこう言われたのだった。「カエサルのはカエサルに、神のものは神に返しなさい」(マタ 22.17-21)。

王よ、日常生活に関わること、すなわち納税、諸税、貢納なら、私たちはあなたに従おう。し

⁵⁷ コンスタンティノポリス総主教(在位 715～730 年)。レオン 3 世との確執がいつ、どのように始まったのかは定かではない。しかし、マリアに捧げた説教が数編残っていることから、聖人への崇敬が対立を深める原因となったと考えられている。730 年、聖像破壊令に反対したため罷免された。ODB, vol. 2, p. 846.

かし、教会の統治においては、私たちには司牧者、すなわち御言葉の説き、教会の法を解釈する者がいる。父祖の定めた境を移してはならない（箴 22.28）。私たちは受け継いできた伝統を保持する。つまらぬことでも、私たちが教会の法を定めるならば、時をおかずに組織全体が地に落ちるだろう。

(13) あなたは物質を蔑み、これをつまらぬものと呼ぶ。これはマニ教徒がしたことだが、聖なる書物は物質を良いものと明言している。曰く、「神は造ったすべてのものを御覧になった。それはとても良かった」（創 2.31）。それゆえ、私は言う。物質は神の被造物であり、良きものである、と。しかし、それを悪いものと言うなら、あなたは物質が神に由来しない、あるいは神を悪の元凶にするとすることになる。あなたの蔑む物質について聖書が述べるところを聞きなさい。「モーセはイスラエルの子の集まり全体に告げた。『主が命じられた言葉を聞け。主はこう仰せられた。あなた方の持ち物から、主に供物を捧げよ。心広き者はそれを主に初穂を捧げよ。すなわち金、銀、青銅、藍玉、紫斑岩、緋色の毛糸、亜麻糸、山羊の毛、赤く染めた羊の毛皮、藍玉で染めた皮、アカシヤ材、塗油用の油、薫りよき香料、彫刻、肩当てや外套を飾る貴石である。あなた方のうち心聴き者は来たりて、主が命じられたものをことごとく、つまり幕屋を造るべし』」（出 35.4-10）

(14) 見よ、尊き物質を、あなたが蔑んでいるものを。染められた山羊の皮よりつまらぬ物は何か。青、紫、緋色は単なる色ではないか。見よ、ケルビムの像を。神はモーセに言われた。「見よ、山で示された型通りに全てを作れ」（出 25.40）。そして、イスラエルの民が輪になってこれを奉った。ケルビムは人々の見えるところになかっただろうか。人々は聖櫃、燭台、祭壇、金の壺、杖を見てひれ伏さなかっただろうか。私は物質を崇めるのではない。物質の創造主、私のために物質となられ、物質に住まうことを決し、物質を通して私の救済を成就された方を崇拝する。「御言は肉となって、私たちの間に宿られた」（ヨハ 1.14）。肉が物質であり、作られたことは衆目に明らかである。私は私の救いをもたらした物質を讃え、敬う。私は神としてではなく、神の力と恩寵に満ちているものとして物質を讃える。もし律法ゆえに像を拒むならば、あなたは安息日と割礼も守るべきである。律法がこれらのことを厳しく命じているのだから。あなたは律法の全てを遵守しなければならず、エルサレムからの主の過越を祝ってはならない。しかし、あなたが律法を守るならば、キリストはあなたの役に立たなくなる（ガラ 5.2）ことを心得ておかねばならない。あなたは兄の妻を娶り、兄の名を継ぎ（申 25.5）、また異教の地で主の歌も歌わぬよう命じられる（詩篇 137.4）。いい加減にしたまえ。「律法により義とされようとする者は誰であれ恩寵から転落している」（ガラ 5.4）。

(15) 私たちは王や主キリストをこの方の軍勢を奪うことなく描く。というのも、聖人が主の軍勢であるからだ。主から主の軍勢を剥奪する前に、地上の王こそ軍勢を捨て去るべきだ。皇帝

に紫衣と王冠を捨てさせてから、かくも勇敢に僭主と戦い、苦難に勝利した人々を捨てさせよ。聖人が神の世継ぎ、キリストの共同相続人、神の栄光と王国に参与する者であるなら、どうしてキリストの友も地の栄光に関与できないのか。神は言う。「私はあなた方を僕とは呼ばない。あなた方は我が友である」(ヨハ 15.14-15)。私たちは教会が与えた栄光を聖人から剥奪すべきではない。何たる軽率、何と恐れ知らずな考えだ。神と争い、神の命に服するのを拒むとは。あなたは像を敬わず、神の御子も敬わない。この方は生きた「目に見えぬ神の像」(コロ 1.15) にして見分けのつかぬ似姿であるというのに。〔= 1.21〕

ソロモンが築いた神殿は獣の血で浄められ、獅子や雄牛、棕櫚や柘榴など、理性なきものの像で飾られた。今、聖堂はキリストと聖人の血で浄められ、キリストと聖人の像で飾られている。きっぱりと像の崇敬をやめるか、父祖の定めた古の境を移すような(箴 22.28)、新説の捏造をやめるかしたまえ。私は我らが主キリストの受肉以前の境ではなく、神の到来以後の〔境〕について話をしているのだ。神は古き律法の伝統を貶して、彼らの心が頑なだったがゆえに「私もまた良くない掟を彼らに与えた」(エゼ 20.25) と仰せになった。「祭司に変更があれば、律法も必ず変更された」(ヘブ 7.12)。

(16) 御言の証人と僕は教会の慣習を書物のみならず、文書によらぬ形でも伝えている。どのようにして私たちは聖なる髑髏の場、生命の記念碑を知ったのか。子は父から書かれたものによらず伝えられたのではなかろうか。確かに主が髑髏の場で磔にされ、ヨセフが掘り出した墓に埋められたことは書かれている。しかし、これらが今日崇敬される場所であることを私たちが知るのには書かれていない伝統によるのである。これに類する例は数多ある。三度の洗礼、つまり三度の浸水の起源は何か。東へ向いて祈るのはどこから来たのか。なぜ十字架を敬うのか。それは伝統によってではないのだろうか。ゆえに、聖なる使徒〔パウロ〕はこう言うのである。「だから、兄弟よ、私たちによって、それが口から発した言葉であっても、手紙であっても、教えられた伝統を固く守り続けなさい」(二テサ 2.15)。教会においては、こうしたものが多く文書によらぬ形で受け継がれ、今なお保持されているのに、あなたはなぜ像について無用な詮索をするのか。〔= 1.23〕

かつてマニ教徒がトマスの福音によって福音をものしたが、あなたはレオン⁵⁸の福音によって福音を書こうとでもいうのか。私は皇帝が暴君のごとく聖職者を圧倒するのを認めない。皇帝は締めつけたり緩めたりする権能を授かつてはこなかった。私は正統信仰を迫害したウァレンス⁵⁹——名によればキリスト教徒——なる皇帝について知っている。また、ゼノン⁶⁰やアナスタシオ

⁵⁸ レオン3世を指す。

⁵⁹ 在位364～378年。妻ドムニカの影響により熱狂的なアリオス派の支持者となる。ODB, vol. 3, pp. 2149-2150.

⁶⁰ 在位474～491年。単性説との妥協を計るため『統一令』を發布した。ODB, vol. 3, p. 2223.

ス⁶¹、イラクリオス⁶²、シチリアのコンスタンティノス⁶³、フィリッピコス・ヴァルダニス⁶⁴を知っている。書かれていようといまいと教父の伝統ではなく、勅令によって教会が整えられたなどと、私は信じない。書かれた福音が世界中で説かれてきたのと同様に、受肉した神キリストや聖人を像に描くこと、十字架を敬うこと、東に向かって祈ることも書面にされずとも世界中で伝えられてきたのである。

主が髑髏の場で磔にされ、[アリマタヤの] ヨセフが掘り出した墓に埋められたことは書かれている。しかし、これらが今日崇敬される場所であることを私たちが知るのには書かれていない伝統によるのである。これに類する例は数多ある。三度浸水する洗礼の起源は何か。東へ向いて祈るのは、十字架を敬うのは何に由来するのか。書かれていないものから伝えられたのではないか。ゆえに、聖なる使徒 [パウロ] はこう言うのである。「だから、兄弟よ、私たちによって、それが口から発した言葉であっても、手紙であっても、教えられた伝統を固く守り続けなさい」(二テサ 2.15)。教会においては、こうしたものが多く文書によらぬ形で受け継がれ、今なお保持されているのに、あなたはなぜ像について無用な詮索をするのか。

(17) あなたが言う慣習は私たちの像に対する崇敬を忌むものとはしない。神を作る異教徒^{エリノ}のそれが忌まわしいのだ。異教徒の悪用を理由に、私たちの敬虔な慣習まで廃する必要はない。魔法使いや魔術師は悪魔払いを行い、教会も洗礼志願者から悪霊を払う。しかし、彼らが悪霊を召喚するのに対し、教会は悪霊に対して神に頼む。異教徒は悪霊に犠牲を捧げ、イスラエルは血と脂を神に捧げる。教会は血なき犠牲を神に捧げる。異教徒は像を悪霊に捧げ、イスラエルは神の像を作る。それゆえ、「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトから導いたあなたの神々である」(出 32.4)と言われるのである。異教徒は悪霊の像を捧げ、教会は受肉した神の、神の僕と友の像を捧げ、像を掲げて悪霊の軍勢を追い払う。〔≒ 1.24〕

(18) もし神々しく祝福されたエピファニオスがこれらの像を禁じているのが明らかだと言うならば、しばしば起こるように、件の著作が偽書であり、神々しきエピファニオスの名において誰か別の人によって書かれたということを知っておかねばなるまい。父は自身の子と争うことは

⁶¹ 在位491～518年。前註のゼノン帝皇后アリアドニとの結婚により、帝位を継承する。単性説寄りの政策を実施した。ODB, vol. 1, pp. 86-87.

⁶² 在位610～641年。ササン朝ペルシアとの抗争を通じて、627年に真の十字架を奪還した。また、いわゆるテマ制の創設者としても有名である。宗教政策では、単性説とカルケドン派の妥協を図るために単意説を支持した。ODB, vol. 2, pp. 916-917.

⁶³ コンスタンス2世(在位641～668年)。祖父イラクリオスの政策を継承し、単意説を支持した。ODB, vol. 1, pp. 496-497.

⁶⁴ 在位711～713年。即位の後、第3コンスタンティノポリス公会議の決議を破棄して単意説を支持した。ODB, vol. 3, p. 1654.

ない。人は皆、唯一の聖霊に参与する者となった。獐猛で残忍な獅子^{レオン}⁶⁵が吠えかかり、キリストの群れを混乱へと投げ込み、神の民が飲む水を汚した時まで、神の教会は像を敬うことの証人だった。〔≒ 1.25〕

(19) もし私が十字架、槍、葦、海綿——これらによってユダヤ人は私の主を嘲り、死に至らしめた——を救いの要因として敬い、讃えるならば、キリスト教徒がキリストの栄光と記念のためによき意図をもって作った像を敬ってはならないのだろうか。もし私が、どんな材質で作ったかはさておき、十字架の像を敬うならば、磔にされた神が十字架の救いを示す像を敬ってはならないのだろうか。何と無法な残忍さであろうか！私が物質を崇めていないのは明らかである。なぜなら、もし十字架を打ち壊さねばならぬならば、それが木製の場合、私は火にくべるだろう。像についても同じである。

(20) 聖書と教父の一致した証言を受け容れたまえ。それは像と像の崇敬が目新しいものではなく、古くから伝わる教会の伝統であることを示している。マタイによる聖なる福音において、主はご自分の弟子たちと、彼らとともに範に倣い、その足跡を辿る全ての人を祝福して仰せられた。「幸いなるかな、あなた方の目は。見ているのだから。幸いなるかな、あなた方の耳は。聞いているのだから。はっきり言うておく。多くの預言者や義人はあなた方が見ているものを見んと欲したが、見られず、あなた方が聞いているものを聞かんと欲したが、聞けなかった」(マタ 13.16-17)。私たちも同様に見られるよう切に願う。像において「私たちは今、鏡に映るものを臍気に見る」(一コロ 13.12) のだから、私たちも祝福されている。神御自身が最初に像を作り、像を示された。なぜなら、「[神は] 神の像に似せて人間を創られた」(創 1.27) からである。

アブラハム、モーセ、イザヤ、預言者の全ては神の像を見たのであり、神の実体を見たのではなかった。[燃える]柴は神の母^{テオミトロス}の像であり、モーセが柴に近づこうとした時、神はこう仰せられた。「足から履物を脱げ。あなたの立つ場所は聖地である」(出 3.5)。さて、もし生神女の像がモーセに示された場所が聖なる土地ならば、像そのものはどれほど神聖なのだろうか。敢えて言うなら、単なる聖ではなく聖の中の聖である。ファリサイ人が主に「なぜモーセは、離縁状を渡して妻と離縁するよう命じたのか」(マタ 19.7) と尋ねた。主は答えた。「あなた方の心が頑固ゆえ、モーセは妻を離縁することを許したのであり、初めからそうではなかった」(マタ 19.8)、と。モーセはイスラエルの子の心が頑なであることを通じて偶像崇拜に陥りやすいのを知っていたので、彼らに像を作ることを禁じた。私たちは同じではない。私たちは信仰という岩の上にしっかりと立ち、神智の光に満たされているのだから。

(21) 主の言葉を聞け。「蒙く愚かな者よ、神殿に誓う者は神殿とそこに住まわれる方に誓う。

⁶⁵ レオン3世を指す。

天に誓う者は神の玉座とそこに坐す方に誓う」(マタ 23.21-22)。そして、像にかけて誓う者は像が表す方に誓うのだ。

(22) 幕屋、垂れ幕、聖櫃、祭壇、幕屋にある全てが像や彫像、すなわち人の手によるものであり、イスラエルを挙げて崇敬されていたこと、ケルビムの彫像が神の命令によって作られたことは十分に証明されてきた。というのも、神がモーセに「見よ、山で示された型通りに全てを作れ」(出 25.40) と命じたからである。また、イスラエルの民が神に従って像と人の手によるものを奉っていたという使徒パウロの証言に耳を傾けたまえ。

「もし、この方が地上にいらしたら、律法に従って供物を献げる祭司がいるのをご覧になり、祭司にならないだろう。祭司は天上にあるものの徴と影に仕える。このことはモーセが幕屋を建て終えようとした時、神が彼に答えた通りである。『見よ、山で示された型通りに全てを作れ』。今や、どれだけ固い約束により定められた確実な契約の仲介者になれるかによって、祭司はよりよい務めを得る。

もし最初の〔契約〕に欠陥がなければ、第二の余地はなかった。欠陥を見つけたからこそ、主は言われた。『見よ、その日が来る。新たな契約によって私はイスラエルの家とユダの家を完全なものとしよう。それは私が彼らの父祖の手を取り、エジプトの地から導いた日に彼らと結んだ契約とは違う』(ヘブ 8.4-9)。その少し後で「神はこれを新しいものと呼び、最初の契約を古びさせた。年を経て古びたものは終わりを迎えようとしている。第一の幕屋があり、中には燭台、祭壇、供物のパンがあった。これが^{アギア}聖所と呼ばれるものである。二番目の垂れ幕を抜けると^{アギア・アギオン}至聖所があった。そこには金の香炉、金で覆いつくされた聖櫃があり、〔聖櫃の〕中にはマナを納めた金の壺、芽吹いたアロンの杖、契約の祭壇が納められていた。また、聖櫃の上には栄光のケルビムが贖いの座を覆っていた」(ヘブ 8.13, 9.2-5)。そしてまた、『キリストは、真実の写し、人の手による聖所ではなく、天そのものに入った』(ヘブ 9.24)。そして、『律法には来るべき善いことの影があり、事柄の像はない』(ヘブ 10.1)。

(23) 律法と律法が命じた全て、そして私たちによる^{ラトリア}崇拜は、物質によって私たちを目に見えぬ神へと導くよう、人の手になるものの聖別にあることがお分かりだろう。ところで、律法や律法による全てのことはやがて来るものの像、すなわち私たちの崇拜の影絵であり、私たちの崇拜は来るべき善きことの像である。天のエルサレムは目に見えず、人の手によらない。同じ聖なる使徒は言う。「私たちはここに不滅の都を持たず、来るべき都を探し求めている」(ヘブ 13.14)。都とは天のエルサレムであり、「神がその設計者と建設者になった」(ヘブ 11.10)。律法による全てのことと私たちの崇拜は天の都の恩寵になった。神が代々永久に讃えられますよう、アーメン。

(24) 聖ディオニシオス・アレオパギティス『ティトスへの手紙』⁶⁶より。

群衆がそれらに抱く偏見に反して、我々は聖なる象徴への聖なる旅をなさねばならず、これらを貶めてはならない。〔これらは〕神の徴の所産にして印章であり、本性を超えた、言い尽くせぬ幻想の像を明示するのだから。〔＝ 1.28〕

(25) 註——彼が讃えられるものの像を嫌悪すべきでないと言っているのを見なさい。〔＝ 1.29〕

(26) 同『神名論』⁶⁷より。

私たちは同じ道筋を辿ってきた。同様に、聖書や父祖の伝統という神のヴェールによって、〔神の〕人間への愛は感覚により知覚されうるもので知性的なものを、実在するもので実在を越えたものを覆い、姿形なきものに姿形をもたらす。そして多様な形にして、本性を越えたものに形を、様々な象徴に姿を与えるのである。〔＝ 1.30〕

(27) 註——私たちの類似に一致して、姿形なきものや単純で形状のないものに姿形をもたらすことが〔神の〕人間への愛に属するとしよう。ならば、姿形を通して見られたものの像を私たちのために作ってはならないことがあろうか。私たちはそれらを記憶に留め、〔像が〕表すものに倣うよう促されるのだ。〔＝ 1.31〕

(28) 同『教会位階論』⁶⁸より。

恭しくも既に言及したが、天上の存在と秩序には形がない。そして、その位階も知性的なものであり、世界を超越している。我々の位階は知覚しうるものの多くの象徴によって形成され、これらは我々の尺度と一致する。象徴は自ずと我々を知性的なものとして理解されるもの、すなわち神とその神的属性へと上昇させる。霊的な精神は自身の霊的な概念を形づくることができる。しかるに、我々は像によって神への観想へと上昇させられる。〔＝ 1.32, 3.44〕

(29) 註——私たちが知覚されうる像によって神の非物質的な観想へと導かれ、人間への愛ゆえに、神の摂理が私たちを手ずからお導きになるために姿形なきものに姿形をもたらしたならば、私たちの能力に準じて、姿形を纏われ、人間への愛から人として見られた方の像を作ること何の不都合があろうか。

伝統により伝わる話がある。エデッサの王アブガルは神への愛ゆえに主の名声に恋い焦がれ、訪問を請うために使節を派遣した。もし主が訪問を拒まれたら、画家に主の似姿を描かせるよう

⁶⁶ 擬ディオニシオス・アレオパギティス『第9書簡』2。Ritter, p. 199.

⁶⁷ 同『神名論』1.4。Suchla, p. 114.

⁶⁸ 同『教会位階論』1.2。Heil, p. 65.

にと命じた。全知全能の主はこれを知り、一枚の端布を取って顔に押し当て、ご自身の姿を写された。件の端布は今日まで伝わっている⁶⁹。〔＝ 1.33, 3.45〕

(30) 聖バシリオス『殉教者バルラウムについての講話』⁷⁰より、「はじめに、聖人の死」と始まっている。

蘇れ、燦然たる勲功の画家よ。そなたの技量で將軍の損なわれし像を讃えよ。彼が〔殉教の〕冠を授かった事情を、私は臆気にしか表しえぬが、そなたは知恵の絵の具で輝かしく描けよう。そなたに圧倒され、かの殉教者の武勲を讃えるのを控えよう。そなたの力に打ちのめされ、この日かような勝利を喜ぼう。私は見る。そなたによって、まさにその通りに描かれた苦闘を、手を火に炙られる〔姿を〕。私は見る。そなたの像に喜びで煌めく戦士〔の姿を〕。悪魔は吠えさせておけ。この輩はそなたに示された殉教者の数多の事績に倒されたのだから。焼かれた手を悪魔に対する勝利として再び掲げよう。我らが主キリスト、かの闘争の審判者が像に現れますよう。神が代々永久に讃えられますように。アーメン。〔＝ 1.34, 3.46〕

(31) 同『アンフィロキオス宛の聖霊論』全30章の第17章⁷¹。

皇帝像が皇帝と呼ばれるにも拘わらず、皇帝は二人いないのだから、その力が分かたれることも、その栄光を共有することもない。我々を統べる権威は一つなのだから、我々の捧げる讃美も一つであり、多数はない。像への敬意は原型にもたらされるからだ。像が示すものは模倣により、御子は本性による。美術と似姿が形に一致するように、神の混合しえない本性とその結合は神と一致するのである。〔＝ 1.35, 3.48〕

(32) 註——皇帝像は皇帝、キリスト像はキリスト、聖人像は聖人ならば、その力が分かたれることも、その栄光を共有することもない。しかし、像の栄光は像に描かれた者の栄光になる。悪魔は聖人を恐れ、その影から逃げる。像は影であり、私は悪魔を退散させるためにこれを作る。あなたが神は霊によってのみ捉えられねばならないと言うなら、身体的なものは全て取り扱うがよい。光、芳香、声の祈り、物質とともに祝われる神の秘蹟そのものを、パンも、ワインも、聖油も、十字架の形も。これらも全て物質である。十字架、海綿、葦、生命を授ける脇腹を貫いた槍。これら全てに捧げられた敬意を不可能なものとして捨て去るか、像への敬意を受け入れるかしたまえ。

神の恩寵は描かれたものの名を通して物質的なものに与えられる。紫、絹、双方で織られた外套は単純にして栄光はない。しかし、皇帝がこれを纏えば、服は着る者の栄光ゆえに栄光を分か

⁶⁹ 上註21 参照。

⁷⁰ バシリオス『殉教者バルラウムについての講話』。PG 31, col. 489A-B.

⁷¹ バシリオス『聖霊論』18.45. Pruche, p. 406.

ちもつ。ゆえに、物質的なものはそれ自体が敬意に値するわけではない。しかし、描かれた者が恩寵に満ちていれば、観者はその信仰に応じて彼の恩寵に与るようになる。

使徒は肉体的な目で主を見た。使徒を見た者もあれば、殉教者を見た者もいる。私は切に望む。心でも体でも彼らを見て、悪魔を追い払う薬を持たんことを。私は二つの本性から成り、目で見、私が見るものを神ではなく荣誉に相応しい人々の誉れある像として敬う。恐らく、あなたは私たちよりも優れ、肉体的なものよりも高次に、謂わば体なき存在に挙げられたのだろう。だから、あなたは目に見えるもの全てに侮って唾するのだ。しかし、私は人間であり、肉を纏っている。聖なるものと肉体的に交わり、それを見たいと切に願っている。私の慎ましき願いを見下すがよい、卓越した者よ、あなたの優越が保てるように。キリストは私のこの方とこの方に属する方々〔聖人〕への憧憬を受け容れてくださる。というのも、大バシリオスが〔セバステの〕四十人殉教者〔を讃える講話で〕述べるように、忠実な僕によって讃えられれば、主人は喜ぶからである。歌に讃えられるゴルディオスを祝福して彼が述べたことをとくと考えてみたまえ。〔＝ 1.36〕

(33) 同『殉教者ゴルディオスについての講話』⁷²より。

義人による事績の記憶は世界中で霊の喜びの源である。人々は聞き知った聖なる事績に倣うよう促される。正しく生きた人々の話は救われようとする人々のために灯火のように道を照らしている。

少し後にもこうある。

我々が敬虔な人生で知られる人々について語る時、我々は第一にこれら僕〔聖人〕の主を讃美し、我々の知る証聖〔殉教〕ゆえにこれらの僕を称讃する。そしてよき知らせをもって人々を喜ばせる。〔＝ 1.37〕

(34) 註——聖人の記憶は神の栄光、聖人の称讃、世界の歓喜と救済であることがお分かりだろう。では、何ゆえあなたはそれを取り去ろうというのか。この神々しきバシリオスが言うように、記憶は言葉と像によりもたらされる。〔＝ 1.38〕

(35) 同講話⁷³より。

灯火は火により、芳香は没薬に由来する。同様に、有益なことはよき行いに続く。過去に起こった出来事の実を捉えるのは容易なことではない。我々に伝わるその人の苦闘の美德は臆気だからだ。では、画家によって作られたこれらの肖像はどうだろうか。画家は像から像を写すので、像はしばしば原型から逸脱する。我々が見るもの自体から目を背ければ、真実を損なう危険は極

⁷² バシリオス『殉教者ゴルディオスについての講話』。PG 31, col. 492A-B.

⁷³ *Ibid.*, col. 493A.

めて少ない。〔＝ 1.39〕

(36) 同講話末尾⁷⁴。

太陽はいつも我々を照らすにもかかわらず、我々を常に感心させる。同様に、この人の記憶も常に新しい。〔＝ 1.40〕

(37) 註——私たちが言葉と像を通して絶えず〔この聖人を〕見ているのは明らかである。〔＝ 1.41〕

(38) そして『至聖なる四十人殉教者についての講話』⁷⁵において、バシリオスは次のように述べる。

殉教者たちを愛する者はどうすれば彼らの思い出を十分に持ちえよう。輩よ、神の僕に捧げられた栄誉は我々に共通の主が善なることへの証言なのだ。

そして、また〔こう続ける〕。

幸いなるかな、〔四十人殉教者について〕心から証しする者は。その意志により殉教者になれる。迫害する者もなく、火〔に焼かれること〕も、殴打〔されること〕もなく、彼らと同じ報いを受けるに相応しい者とされる。〔＝ 1.42〕

(39) 註——何ゆえあなたは聖人の栄誉から私を閉め出し、私が救われていることを妬むのか。形が色で表されることを知る者は、彼がその後で述べることも聞け。〔＝ 1.43〕

(40) バシリオス⁷⁶。

揃って我らの真中に来なさい。講話では、これらの人々の素晴らしい事績を掲げよう。そして、参列者に共通の助けとなるよう、彼らから教訓を得て、絵におけるように、皆に彼らを示そう。〔＝ 1.44〕

(41) 註——像と言葉の働きが一つであることがお分かりだろうか。彼は言う。「我々は絵におけるのと同様に言葉によって示そう」。〔＝ 1.45〕

(42) そして、こうした言葉もある⁷⁷。

⁷⁴ *Ibid.*, col. 508A.

⁷⁵ バシリオス『セバステの四十人殉教者についての講話』。*Ibid.*, col. 508B.

⁷⁶ *Ibid.*, col. 508C-D.

⁷⁷ *Ibid.*, cols. 508D-509A.

さらに、作家と画家は双方とも疑いなく戦の勲を描いてきた。前者は修辞によりそれらを礼讃し、後者は画板に描いた。双方とも多くの人々に優れた行為を喚起させる。言葉が聴覚にもたやすものとまさに同じものを、言葉なき図像は模倣によって描き出すのである。〔＝ 1.46, 3.47〕

(43) 註——像が文盲の書物、聖人の栄光を伝える言葉なき先触れであり、音なき声で見る人々を教え、視覚を聖別することを、この行以上に明示するものがあるだろうか。私はさして多くの本を持たず、それを読む時間もさほどない。しかし、考えに押し潰されそうになると、聖堂——私たち皆の魂の避難所——に入る。絵画の艶は私を観想へと誘い、牧場のように私の目を楽ませる。そして、いつの間にか私の魂を神の栄光へと案内するのである。私は殉教者の堅忍と冠の報いを見た。あたかも火によるかのように私は情熱を燃え立たせて跪き、殉教者を通して神を崇拜し、救いを受ける。同じ神々しき教父〔パシリオス〕が詩篇冒頭に関する講話でこう言っているのを私は聞かなかっただろうか。「聖霊は人間が怠惰で美德に向かって動かしがたいとご存じだったので、詩篇の歌声と旋律を調和させたのである」⁷⁸。これをあなたは思うか。この殉教者たちの殉教を言葉と絵の具で描いてはならないのだろうか。そしてかの教会の導き手が言うように、「天使や全ての被造物には素晴らしく、悪魔には苦痛に満ち、悪霊には恐れ多いもの」⁷⁹を目と口で抱いてはならないのだろうか。そして、四十人殉教者に関する講話の末尾で彼は次のように述べる⁸⁰。

「おお、聖なる聖歌隊よ。おお、聖別された兄弟よ。おお、打ち破りがたき軍勢よ。人類の守護者よ、悩める者の慰め、嘆願者の望み、いとも力強き執り成し手、世の光、教会の花——霊的にも物質的にも——。地はあなたを隠さず、天はあなたを受け容れる。御国の門があなたに開かれますように。〔その眺めは〕天使の軍勢に相応しく、総主教に相応しく、預言者や義人にも相応しい」。〔＝ 1.47〕

(44) 註——天使ですら見たいと切に願っているものをどうして私が切望してはならないのだ。これと一致して、彼の弟、同意見のニッサ主教グリゴリオスの述べるところを見てみよう。〔＝ 1.48〕

(45) ニッサ主教、聖グリゴリオスの補遺、すなわち『人間創造論』第4章⁸¹より。

為政者の像を作る者は特徴だけでなく紫衣により王の威厳も表そうとする。よって、その像も習慣的に王と呼ばれる。人間の本性も同様である。人は万物を統べるべくして創られた際に、生

⁷⁸ パシリオス『詩篇に関する第1講話』。PG 29, col. 212B.

⁷⁹ 同『殉教者ゴルディオスについての講話』。PG 31, col. 501B.

⁸⁰ 同『セバステの四十人殉教者についての講話』。Ibid., col. 524C.

⁸¹ ニッサのグリゴリオス『人間創造論』4。PG 44, col. 136C.

ける像として建てられ、王としての尊厳も名も原型たる方に与った。〔＝ 1.49〕

(46) 同書第5章⁸²より。

神的な美は外形や見事な姿や美しい色調を通して輝くものではない。むしろ、徳によるえも言われぬ至福において観想されるものである。画家は人の形を様々な絵の具を使って画板に移し、それぞれの部分に適した色彩を施し、原型の美しさを正確に似姿に移し換える……。〔＝ 1.50〕

(47) 註——「神的な美は外形や見事な姿や美しい色調を通して輝くものではない」のだから、それは描くことはできない。絵の具によって画板に移しえるのは人間の形なのである。神の御子が人となり、僕の姿をとり、完全な人として人間の本性において見られたならば、何ゆえこの方の像を描いてはならないのだろうか。俗な言い回しをすれば、王の像は王と呼ばれ、聖なるバシリオスが述べるように、像への敬意は原型にもたらされる。それならば、像は神としてではなく受肉した神の像として讃え、敬われてはならないのだろうか。〔＝ 1.51〕

(48) ニッサのグリゴリオスが、コンスタンティノポリスにおいて御子と聖霊の神性、およびアブラハムについて説いた『講話44番』⁸³より。「そうしたものを好んで見る人々が花で飾られた草原により心動かされるように」との書き出しで始まる。

父は子を縛るために進む。私はこの痛ましい場面を描いた絵をしばしば見てきたが、涙なしには見られなかった。その絵はそれほど鮮明にこの場面を表している。イサクは祭壇の前に横たわり、足は縛り付けられ、手は後ろ手に縛られている。父は犠牲に近づき、左手でその神を掴んでいる。父は顔の上にひどく悲しげに屈み、息子の方を見る。右手に剣を持ち、まさに打たんとしている。切っ先が体に触れるまさにその時、神の声が聞こえ、手を下すことを禁じた。〔＝ 1.52, 3.50〕

(49) ヨアンニス・クリソストモス『ヘブライ人への手紙註解』⁸⁴より。

ある決まった方法で、第一のものは第二のものの像である。メルキゼデクはキリストの〔像である〕。このように言う者もあろう。絵の模写は色において絵の影である。したがって、律法はやがて来るものの影、恩寵、真実、実在性と呼ばれる。それゆえ、律法とメルキゼデクは色における絵の先備的な模写であり、恩寵と真実は色におけるその絵である。これに対して、実在性はやがて来るものに属する。ちょうど旧約が摸像の摸像であり、新約が実在性の像であるように。〔＝ 1.53, 3.51〕

⁸² 同書5。Ibid., col. 137A.

⁸³ ニッサのグリゴリオス『御子と聖霊の神性について』。Rhein, pp. 138-139.

⁸⁴ 典拠不明。ヘブライ人への手紙についての『第12講話』はField, vol. 7, p. 150.

(50) キプロス、ネアポリス主教レオンティオス『十字架と聖人像と聖遺物への崇敬に関するユダヤ人駁論』⁸⁵より。

ユダヤ人よ、木の十字架を敬っていると言って私を非難するならば、なぜヤコブを非難しないのか。彼も杖の先を敬ったのではないか。ならば、彼が杖を崇拝したのではないのは明らかだ。それは我々と同様である。我々は十字架を通してキリストを崇拝しているのであり、十字架の木を崇拝しているわけではない。〔＝ 1.54〕

(51) 註——いかなる木材にせよ、私たちが十字架を敬うならば、どうして礎にされた方の像を敬ってはならないのだろうか。〔＝ 1.55〕

(52) また同じレオンティオスより。

アブラハムは彼に洞窟を売った不敬虔な人々に挨拶し、地に跪いたが、それでも彼は彼らを神として崇めたわけではない。ヤコブは不敬虔な偶像崇拝者ファラオを讃えたが、それでも神としてではない。さらに兄エサウにも跪いたが、彼を神として崇めてはいない。そして、また何ゆえ神は大地や山々を敬うよう我々に命じたのだろうか。「主、あなたの神を讃えよ。神の聖なる山の上で神を崇め、神の足台を拝め」(詩 99.9)。これはすなわち大地である。神は仰せになる。「天は我が玉座、地は我が足台」(イザ 66.1)。

モーセはエトロに挨拶し(出 18.7)、ダニエルはネブカドネツアルに挨拶したのはどうだろうか。どのように私を非難できようか。私は神を讃える人々を讃え、神に勤めを示しているのだから。教えてほしい。あなたがするように、聖人の像に石を投げるよりはむしろ、聖人を敬うことは相応しくないのか。聖人を攻撃し、あなたの恩人を泥濘に投げ込むよりはむしろ、聖人を敬うことが正しくないのか。あなたが神を愛していたならば、聖人を敬うことも吝かではないだろう。

義人の骨が不浄ならば、何ゆえヤコブとヨセフの骨は讃美されながらエジプトから持ち出されたのだろうか(創 50.5、出 13.19)。死者がエリシャの骨に触れたとたんに蘇ったのはどうだろうか(王下 13.21)。神が骨を通して奇跡をなされるのならば、像や石、その他多くのものを通して奇跡をなされるのも明らかである。エリシャは僕に杖を渡して言った。「これをもって行きなさい。そしてシュネムの婦人の息子を死の淵から蘇らせなさい」(王下 4.29)。モーセは杖をもってファラオを罰し、水を割り、岩を打って泉を湧き出させた。ソロモンは言う。「義をもたらしした木は祝福される」(知 14.7)。エリシャは木の枝を投げてヨルダン川から斧を拾い上げた(王下 6.4-7)。その木は生命の木、藪の木、すなわち赦しの木である。モーセは木に〔青銅の〕蛇を掲げ、民を救った(民 21.9)。幕屋において芽吹いた杖はアロンが祭司であることを確かなものとした(民 17.8)。

ユダヤ人よ、神は幕屋において聖櫃の全てのものに関してモーセに予め指示を与えていたのだ

⁸⁵ 上註40 参照。

と、あなたは言うだろう。しかし、私はこう答えよう。ソロモンは神殿内に彫刻や浮彫で様々なものを作った。それらは神も命じられてはいない（歴下 3.1）。幕屋の聖櫃も、神がエゼキエルに示された神殿も（エゼ 40.47）、それらを含んでおらず、ソロモンも個連ついで咎められなかった。我々と同様、彼も神の栄光のために彫像を作ったのだ。恩を忘れて失わなければ、あなたも神を思い出すのに役立つ様々な旧約の像や象徴を持っていただろう。例えば、モーセの杖、律法の石板、燃える柴、水を湧き出した岩、マナを納めた聖櫃、天からの火が燃える祭壇、神の名を湛える葉、エフォダ、神に覆われた幕屋。あなたが昼夜を分かたずにこれらを備えていたならば、「あなたに栄光のあらんことを、全能の神よ。あなたはこれらを通じてイスラエルに奇跡を起こされた」と言うだろう。これら全て律法が命じたことを通して跪いて神を崇拝していたならば、像を通じて神に崇拝が捧げられると言うことがお分かりだろう。

そしてさらに続く。

友人や王、とりわけ恩人を心から愛する者がいたとしよう。その彼が恩人の息子や職杖、椅子や冠、家や僕を見たならば、それらを堅く抱きしめるだろう。その彼が恩人や王を湛えるならば、神はいかばかりだろう。繰り返しになるが、あなたがモーセや預言者の律法によって像を作っていたならば、日々神の像を敬っていただろう。それゆえ、あなたが十字架に祈るキリスト教徒を見るときはいつでも、ただの木ではなく、礎にされたキリストを崇めていることを知るべきだ。彼らが木を木として讃えるならば、イスラエルよ、かつてあなたが木や石に「あなたは我が神、私を生まれた方」（エレ 2.27）とやって崇めていたように、彼らも種類が何であれ木を崇拝しなければならないだろう。我々は十字架にも聖人像にもこのように話しかけたりしない。それらは私たちの神ではない。しかし、祭壇に開いておかれた聖書は私たちに神を想起させ、神を崇めるよう導くために崇敬されている。殉教者を讃える者は神も讃える。というのも、殉教者はこの方のために証聖したのだから。使徒を敬う者は使徒を使わしたキリストを敬う。キリストの母に跪く者は間違いなくその息子を讃えている。唯一の神の他に神はなし。この方は三位一体において知られ、崇められる。〔＝ 1.56〕

（53）註——これが幸いなるエピファニオスの言葉の忠実な解釈である。エピファニオスは自らの言葉でキプロスの島や心から語る人々を飾る。ガバラ主教セヴェリアノスの証言にも耳を傾けよう。〔＝ 1.57〕

（54）ガバラ主教セヴェリアノス『十字架の奉獻について』⁸⁶より。

非難された者〔蛇〕の像が我々の父祖に命を与えたことはどうだろうか。

非難された者の像が苦難に喘ぐ民を救ったことはどうだろうか。こういった方がより理に適っているのではないか。「あなた方のうち咬まれた者があれば、天を、神を見上げさせよ。さすれ

⁸⁶ セヴェリアノス『蛇についての講話』。PG 56, cols. 499-516.

ば、神が救ってくださる。あるいは神の幕屋を見やるようにせよ」と。これを無視して、彼は十字架の像のみを掲げたのだ。なぜモーセはこうしたのだろうか。モーセは言った。「上は天にあり、下は地にあるものの、そして地の下の水にあるものの、いかなる像も作ってはならない」(出20.4)。しかしながら、私は何ゆえつまらぬ人々に語るのだろうか。敬虔な神の僕よ、教えてほしい。あなたは禁じられていることをし、するように命じられたことを疎かにするだろうか。「いかなる像も作ってはならない」と言われた方は黄金の子牛を咎められたが、あなたは秘密裏にではなく公然と青銅の蛇を作った。ゆえに、このことは皆が知っている。

モーセは答える。「私があのように命じたのは不信心な振る舞いを根絶やしにし、民を背教や偶像崇拜から遠ざけるためであった。私は蛇をよき目的のため真実の形として掲げさせた。私は幕屋を建て、あらゆるものを中に納めさせ、不可視の力の似姿であるケルビムを至聖所一面に施したが、それは未来の徴や形としてであった。よって、私は十字架の像と贖罪の先取りとして民の救いのために蛇の像を掲げたのである」。その証左として主の言葉を聞け。「モーセが砂漠で蛇を讃えたように、人の子を讃えよ。神を信ずる者は失われず、永遠の命を得る」(ヨハ3.14)。(= 1.58, 3.52)

(55) 註——次のことを理解なさい。像を使ってはならないという命令は、民が偶像崇拜に堕しがちであったがゆえに、偶像崇拜から民を引き離すために与えられた。そして、青銅の蛇は主の苦しみの像である。(= 1.59)

(56) 像の発明は新しいものでなく古来の慣習である。聖にして選ばれたる教父もこれに精通している。聞きたまえ。このことは〔大バシリオスの〕弟子にして後任の主教エラディオスによる『聖バシリオス伝』⁸⁷に書かれている。この聖者は我らが女王〔マリア〕のイコンの前に立っていた。それには永久に讃えられる殉教者メルクリオスの像が描かれていた。この方は立って、神も恐れず教えに背いた僭主ユリアノスを覆さんと祈っていた。この像から彼は啓示を知った。彼がしばらくそれを眺めていると、殉教者が消え、その後まもなく血糊のついた槍を手にして〔殉教者が現れたのである〕。(= 1.60, 3.53)

(57) 『ヨアンニス・クリソストモス伝』⁸⁸には、まさにこのように書かれている。

幸いなるヨアンニスはいつも聡きパウロの書簡をこよなく愛読していた。

そしてさらに続く。

ヨアンニスはこの使徒パウロのイコンを持っており、それを体の弱さゆえに小休止を取っていた場所に置いていた。体力の限界を超えてまで晩禱を捧げるのが常だったのだ。ヨアンニスは使

⁸⁷ 上註43 参照。

⁸⁸ 上註45 参照。

徒の手紙を読み終えると、使徒の像を前に置き、あたかも使徒がそこにいるかのように話しかけたものだった。そして、彼は使徒を讃え、全思考を彼に傾けた。

他の話の後に。

プロコロスは話し終えると、使徒のアイコンを見つめた。そしてその姿が彼に現れた人物の似姿であることに気がついた。プロコロスはヨアンニスに敬礼しながら、アイコンを指さして言った。「お許してください、父よ。私があなたに話しかけているのを見た人物はの方です。まさしく同じ人です」。〔＝ 1.61, 3.54〕

(58)『聖エウプラクシア伝』によれば、主の護る群れの中に主の似姿が彼女に現れたという⁸⁹。〔＝ 1.62〕

(59)『エジプトのマリア伝』によれば、彼女は我らが女王の像に祈り、執り成し手になってくださるように祈った。こうして、彼女は聖堂に入ることができた⁹⁰。〔＝ 1.63〕

(60)新旧[約]の法の与え主が一人であること、司祭の服装についてのクリソストモスの講話⁹¹より。

そして、私は敬虔さに満ちた蜜蠟画を愛する。私はアイコンで天使が野蛮人の一隊を打つのを見た。私は野蛮人の部族が蹂躪され、ダヴィデがかく真実を言うのを見た。「主よ、あなたはあなたの町で彼らの像を無にされました」(詩 72.20)。〔≒ 3.105〕

(61) 同じく〔クリソストモスの〕『種の譬え註解』⁹²より。

あなたが皇衣を侮るなら、それを纏う人物も侮っていないだろうか。あなたは知らないのだろうか。皇帝の像を侮るなら、原型の尊厳も侮蔑することを。あなたは知らないのだろうか。人の形をした木像や銅像を引き倒す者があれば、その者は命なき物質にそうした者ではなく、皇帝を侮辱しようとした者として裁かれることになることを。皇帝の像に対する侮蔑は皇帝自身にもたらされるのである。

(62) 同じヨアンニス・クリソストモスによる、アンティオキア主教にして殉教者メレティオス⁹³、ともに参集した人々の篤き信仰についての講話⁹⁴より。「聖なる人々の群れに視線を投げて」という

⁸⁹ 詳細は『第三の論駁』136 参照。

⁹⁰ 詳細は『第三の論駁』135 参照。

⁹¹ 実際にはガバラ主教セヴェリアノスの講話である。PG 56, col. 407.

⁹² 出典不明。

⁹³ アンティオキア総主教(在位 360～381 年)。アリオス支持の諸帝の下で 3 度配流される。アンティオキアでは、メレティオスと彼の不在時に選出された 2 人の総主教が並び立つ総主教鼎立の時代となる。ヨアンニス・クリソストモスはメレティオスにより叙階された。OBD, vol. 2, p. 1333.

⁹⁴ ヨアンニス・クリソストモス『聖メレティオス讃』。PG 50, col. 516.

一節で始まり、少し後には [こうある]。

彼がなしたことは敬虔なる教えである。我々は絶えず強いて彼の言説を思い起こされ、我々の魂の内にかの聖人を住ませる。彼の名はあらゆる不合理な苦しみや考えからの避難所となる。こうしたことは通りでも、市場でも、野辺でも、そこかしこで頻繁に起こり、この名がいたるところで木霊した。あなたにも彼の名だけでなくその体の形に憧れたことがあるだろう。それゆえ、あなたが彼の名とともに何をなそうと、彼の像も形づくっているのだ。多くの人がその聖なる像を指輪、カップや皿、寝室の壁、どこにでも描いている。そうすることで、彼らはその聖なる言説を聞くだけでなく、その体の形を辺り一帯で見ることができる。こうして彼が旅立ってしまったことに二重の慰めを得るのだ。

(63) 同じ [クリソストモスの] ユダの背信、復活祭、秘蹟の伝統、憤慨しないことについて⁹⁵。画家が画板に線を描き、色で真実を加えていくように、キリストも同じことをするのである。

(64) ミラノ主教アンブロシオス⁹⁶の全イタリアに宛てた手紙⁹⁷より。

断食三日目の夜、体は征服され、私は眠れなかった。恍惚としてしていると、何者かがある人の顔をして私に現れた。その顔は幸いなる使徒パウロのそれによく似ており、イコンに見られる同じ形が彼の姿を示しているのは明らかだ。

(65) 哲学者、証聖者マクシモス⁹⁸、彼と主教テオドシオスの間に起こったことより⁹⁹。

この時、皆が歓喜と涙とともに立ち上がり、挨拶をし、祈りが行われた。彼らはそれぞれ聖なる福音書、貴き十字架、我らが神、救世主イエス・キリストのイコン、我らが女王、至聖なる神

⁹⁵ ヨアンニス・クリソストモス『ユダの裏切りについての第一の講話』。PG 49, col. 379.

⁹⁶ ミラノ司教（在位 374～393 年）。ローマの高級官僚の子として生まれる。374 年、アエミリアとリグリアの知事となる。同年、アリウス派のミラノ司教が死去すると、民衆はアンブロシウスが俗人であるにもかかわらず、ミラノ司教となるように要求した。390 年、テサロニキで住民を虐殺したテオドシオス 1 世を破門し、公式に謝罪させた。カッパドキア三教父の著作に親しみ、西方に東方の教父思想を普及させた。^{ODB}, vol. 1, pp. 76-77.

⁹⁷ 偽書。M. Aubineu, "Jean Damascène et epistula de invention Gervasii et Protasii attribuée à Ambroise," *Analecta Bollandiana* 90 (1972), p. 8.

⁹⁸ 580 年、コンスタンティノポリスに生まれる。貴顕の子息とも、サマリア人商人とペルシア人奴隷の子とも伝えられる。エルサレム近郊のパレア・ラヴラ修道院滞任後、イラクリオス帝の秘書官に抜擢される。630 年頃、エルサレム総主教ソフロニオスの支持者であることを糾弾されて、アフリカに逃亡し、反単意論の論陣を張る。649 年、ラテラン教会会議で教皇マルティヌス 1 世と単意論に異を唱え、コンスタンス 2 世により舌と右手を切除される。655 年にビジャ、662 年にラジツアに配流されて亡くなった。^{ODB}, vol. 2, pp. 1323-1324.

⁹⁹ 『証聖者マクシモスとビジャ主教テオドシオスの議論』。PG 90, col. 156.

の母——この方が神を生まれたのだ——のイコンに口づけした。彼らの手は語られていたことを確認するように置かれていた。〔≒ 3.131〕

(66) 至聖にして至福なるテウポリス大主教、総主教アタナシオス¹⁰⁰ によるボストラ主教シメオンに宛てた『安息日について』¹⁰¹ より。

皇帝が不在の折には、その像が彼に代わって敬われる。皇帝がいる時に、原型を蔑ろにして像を敬うのは奇妙なことだろう。しかし、その人ゆえに像が敬われる人物がいる際に像が敬われな

いからといって、その像を貶めているということにはならない。

さらに続く。
たとえ像が木と蠟と混ぜられた絵以上の何ものでないとしても、皇帝像を罵った者は皇帝その人の名誉を汚したかのように罰は免れない。このように、何者かの像を貶める者はその姿が描かれた人をも侮辱することになる。〔≒ 3.127〕

(67) 私たちの聖なる教父、エルサレム総主教ソフロニオス『霊の園』¹⁰² より。

修道院長テオドロス・アイリオティスはオリブ山の聖なる隠者について語った。かれは姦淫の悪魔に大層脅かされていた。ひどく誘惑されたある日、彼は苦々しげに不平を漏らした。彼は悪魔に言った。「いつになったら独りにしてくれるのだ、儂から去ね」。すると、悪魔が現れて言った。「私がこれから言うことを守るように誓え。そうすればお前をこれ以上煩わせまい」。老人は誓った。すると悪魔が言った。「この像を敬うな。さすればお前を苦しめない」。件の像には我らが女王、生神女、聖なるマリア様が腕に我らが主イエス・キリストを抱く姿が描かれていた。隠者は悪魔に言った。「去ね。考えておこう」。

明くる日、このことはファランのラヴラに住まう修道院長テオドロス・アイリオティスの知るところとなった。彼〔テオドロス〕は彼〔隠者〕のところに行き、全てを聞いた。老人は隠者に言った。「そなたが誓った時、そなたは馬鹿にされたのだよ。しかし、よくぞ真実を明かしてくれた。そなたには我らが主、神イエス・キリストとその母君を敬うことを拒むよりも、この町の人の入らぬ遊郭など残さぬようにするがよい」。彼〔テオドロス〕は多くの言葉で〔隠者を〕力づけ、決意を固めさせて、在所に帰るため去っていった。

すると、再び隠者に悪魔が現れて言った。「これは一体どうしたことだ、邪な尊者^{カコギロス}¹⁰³ よ。お前

¹⁰⁰ アンティオキア総主教（在位 593～598 年）。新カルケドン派の一翼をなしたが、キリストにおける神人両本性の「一致」を強調する等、単性説穏健派とも受け取られた。いずれにせよ、ダマスコスのヨアンニスの時代には双方の権威として見なされていた。 ODB, vol. 1, p. 87.

¹⁰¹ アンティオキアのアナスタシオス『安息日についての断片』。 PG 89, col. 1405.

¹⁰² ヨアンニス・モスコス『霊の園』45。 PG 87, col. 2900B-D. ビザンティン時代にはモスコスの旅に同行したソフロニオスの著作として引用される。

¹⁰³ 上註50 参照。

は誰にも言わぬと誓わなかったか。それなのに、どうしてお前のところに来た者へ全てを話したのだ。言っただろう、邪な老人よ。お前は裁きの時に偽証者として裁かれるだろうよ」。隠者は答えていった。「儂が誓ったことは儂が誓ったのだ。私が自分を欺いたことぐらい、知っておるわ。じゃが、儂は間違っただけ、主、造り主に誓ったのだ。お前の言うことなぞ聞かん」。〔＝ 1.64〕

(68) 註——これでお分かりだろう。彼は描かれた方の像を敬うことについて語っている。これを敬わぬことがいかに邪悪であり、どうして悪魔が姦淫よりも「こうした崇敬を」選んだかまご覧になっただろう。〔＝ 1.65〕

(69) これまで聖職者や皇帝の多くが天、神に由来する知恵を授かり、信仰、教義、生涯によって見極められてきた。そして、聖にして天啓を受けた教父の教会会議が幾度となく開催されてきた。それにもかかわらず、何ゆえ誰もこれらのことを説明しようとしなかったのだろうか。新たに説かれた信仰を許してはならない。聖霊は仰せになった。「律法はシオンから、主の言葉はエルサレムよりいずる」（イザ 2.3）。様々な時代に案出された多様な教え——時代とともに移り変わる——を許してはならない。信仰が部外者の物笑いの種とならぬよう。教父伝来の慣習がそれを覆さんとする勅令に服することを許してはならない。教会の法を覆すのは敬虔な皇帝の所行にあらず、教父の道でもない。力によってこれらを強いるのは海賊に等しく、広がりはずまい。その証拠がエフェソスで催された2度目の教会会議であり、これは「盗賊会議」と呼ばれている。皇帝の手により強要され、幸いなるフラヴィアノスは死に追いやられた。これらはあくまで教会会議の事柄であり、皇帝ではない。主はこう仰せである。「私の名の下に二人三人と集まれば、彼らの中に私はいる」。キリストが緩急の権能を授けたのは皇帝ではなく、使徒、そして牧者や教師として彼らの後を継いだ人々である。「もし受け容れたものに反する福音を説く者がいれば」と使徒パウロは言われたが、彼らを見逃し、改心を願って続きは言うまい。しかし、対話もなく彼らの狂気が続くようなら、残りの言葉を採り入れるとしよう。願わくば、その必要がなからんように。〔＝ 1.66〕

(70) 誰かがある家に入ってきて、画家が色でモーセとアロンの物語を描いた壁があったとしよう。その人は恐らく海を抜けて乾いた土地に民を導いた方々について訪ねるだろう。「彼らは誰ですか」。こう尋ねられたら、あなたはどうか答えるだろうか。「イスラエルの子らですか」。「杖で海を打っているのは誰ですか」。「モーセですか」。誰かが磔にされたキリストを描き、「これは誰ですか」と尋ねたら、彼はこう答えるだろう。「キリスト、神、私たちのために肉となられた方です」。

主よ、私は強い憧れとともにあなたのもの全てを敬い、奉じる。あなたの神性、あなたの力、あなたの善意、あなたの憐れみ、私たちの境遇への逡巡、あなたの受肉、あなたの肉体の全てを。私が赤熱した鉄に触れるのを恐れるのは、鉄の本性ではなく、鉄と一つになった火ゆえである。

同様に、私があなたの肉を敬うのは、肉の本性ではなく、位格において一致した神性ゆえである。私はあなたの苦しみを敬う。死が敬われ、苦しみが敬意をもって扱われるのを見るものがあるだろう。しかし、私たちは真実に私たちの神の肉体的な死と救いの苦しみを敬う。私たちはあなたの像を敬う。あなたのもの全てを敬う。あなたの僕、あなたの友、何にもましてあなたを生まれた母君を。〔＝ 1.67〕

(71) ゆえに、神の民、聖なる御国に教会の伝統を保持するよう懇願する。建物から小さな石を一つ取っただけで建物はすぐに倒壊してしまう。例え些細なことでも、伝えられてきたものも取り除いてしまえば同じ憂き目に遭うだろう。私たちは断固として怯まず、冷静でいよう。堅固な岩の上に身を立てよう。その岩とはキリストである。栄光、栄誉、崇敬が代々永久に御父と聖霊とともにこの方に帰せられますように。アーメン。〔＝ 1.68〕